



伊豆半島ユネスコ世界ジオパーク

基本計画・行動計画

2021-2025



伊豆半島ジオパーク推進協議会

2021 年（令和 3 年）7 月

目 次

第1章 策定にあたり

1	ユネスコ世界ジオパークとは	3
2	伊豆半島ジオパーク基本計画及び行動計画改定の目的	5
3	伊豆半島ジオパークのこれまでの取り組み成果と課題	6
4	計画期間	8
5	伊豆半島ジオパークが分担し達成する持続可能な開発目標（SDGs）	8

第2章 伊豆半島ジオパークの概要

1	伊豆半島ジオパークの名称	9
2	伊豆半島ジオパークの位置	9
3	伊豆半島ジオパークの面積	9
4	伊豆半島ジオパークの地質の概要	10
5	伊豆半島ジオパークの自然地理の概要	12
6	伊豆半島ジオパークの人文地理の概要	12

第3章 伊豆半島ジオパークのサイトと遺産

1	サイト区分の見直し	16
2	サイト分布図	17
3	サイトリスト	18
4	代表的なジオサイト	22
5	代表的な文化サイト	23
6	代表的な生態サイト	24
7	代表的な眺望サイト	25
8	代表的な災害サイト	25
9	文学者と伊豆	26
10	無形文化遺産	26

第4章 伊豆半島ジオパークの目指すビジョン

1	輝く ^{みらい} 次世代へ、動き続ける伊豆半島	28
2	伊豆半島ジオパークが目指す姿	28

第5章 取り組み方針と行動計画

1	研究と保全	29
---	-------	----

2	教育活動（学校・社会）	35
3	ツーリズム・地域振興	38
4	災害リスクの軽減	41
5	運営体制の強化	44
6	ネットワーク活動の強化とパートナーシップ	50
7	普及広報・情報発信計画	54

第6章 活動の評価

1	活動評価についての基本的な考え方	60
2	日本ジオパーク委員会（JGC）及びユネスコによる評価	60
3	GGNの年次報告書（毎年）	60
4	ユネスコによる再審査（4年に1回実施）	60
5	顧客による評価	60
6	サステイナブルツーリズムの効果測定	61

別冊【資料編】

基本計画策定のためのワークショップ概要およびアンケート結果

基本計画策定に関するパブリックコメントへの意見および推進協議会の回答

SDGs とは

伊豆半島ジオパークにおける自然遺産リスト

伊豆半島ジオパークにおける文化遺産リスト

第1章 策定にあたり

1. ユネスコ世界ジオパークとはー地球の遺産をたたえ、地域社会をつくろうー

ユネスコ^{注1)}の支援によって2004年（平成16年）に世界ジオパークネットワーク（GGN：Global Geoparks Network）が設立されました。GGNはユネスコ世界ジオパークネットワーク認定地域が情報や運営のノウハウを交換するためのネットワーク組織です。その後2015年（平成27年）11月、ユネスコ総会でジオパークはユネスコの正式プログラムとなり、ユネスコにおいては生態・地球科学部門が所管しています。2021年（令和3年）4月現在、ヨーロッパと中国を中心に44か国169のジオパークがユネスコ世界ジオパークに認定されています。

ユネスコ世界ジオパークは、国際的に価値のある大地の遺産を保護し、そうした遺産と関連する自然環境や地域の文化への理解を深め、科学研究や教育、地域振興等に活用することにより、自然と人間の共生及び持続可能な開発を実現することを目的とした事業です。ユネスコの国際地質科学ジオパーク計画の一事業として実施されており、認定基準は次のように定められています。

ユネスコ世界ジオパーク認定基準

- 1 ユネスコ世界ジオパークは、国際的な価値がある地学的重要性を有するサイトや景観が、保護・教育・研究・持続可能な開発が一体となった概念によって管理された、単一の、統合された地理的な領域でなければならない。ユネスコ世界ジオパークは、明確に定義された境界線と、その機能を全うするために適当な面積があり、独立した科学の専門家によって評価された国際的に重要な地質遺産を含めなくてはならない。
- 2 ユネスコ世界ジオパークは、当該地域の自然・文化遺産のあらゆる分野と関連した遺産をもって、我々が暮らす変動する惑星のなかで、社会が直面している重要課題への意識を高める目的で活用されるべきである。そこには、地球科学のプロセス、地質災害、気候変動、地球の自然資源の持続的利用の必要性、生命の進化と先住民のエンパワーメント（権限移譲）に関する、知識と理解の増大が含まれるが、それに限定されない。

注1) ユネスコ（国際連合教育科学文化機関、UNESCO）は、諸国民の教育、科学、文化の協力と交流を通じて、国際平和と人類福祉の促進を目的とした国際連合の専門機関です。

- 3 ユネスコ世界ジオパークは、国の法令の下で法的位置づけのある管理運営を有する地域でなければならない。管理運営団体は、ユネスコ世界ジオパークのエリア全体を十分に扱うために適切な能力を有するべきである。
- 4 ユネスコ世界ジオパークのエリアが、世界遺産や生物圏保存地域（MaB 計画）といった他のユネスコ認定サイトと重複する場合、ユネスコ世界ジオパークが他の認定と独立してブランドされながら相乗効果を出すことで、その地域にどう価値を付加できるのかを証拠を示さなければならない。
- 5 ユネスコ世界ジオパークは、ジオパークの重要な利害関係者として地域社会や先住民を積極的に協働すべきである。地域社会と連携のもと、地域住民の社会的、経済的な要求に応え、景観を保護し、文化的アイデンティティを保全する管理運営計画が策定され実行される必要がある。すべての関連する地域、地域の関係者・公共機関は、ユネスコ世界ジオパークの管理運営に参加することが奨励される。科学と併せて、地域や先住民の知識・慣習・管理制度が、その地域の計画や管理に含まれるべきである。
- 6 ユネスコ世界ジオパークは、GGN において、経験と助言を共有し、共同プロジェクトに取り組むことが推奨される。GGN の加盟は義務である。
- 7 ユネスコ世界ジオパークは、地質遺産の保護に関連する地域や国内の法令を尊重しなければならない。ユネスコ世界ジオパークにおいて位置づけされた地質遺産サイトは、法的に保護されなければならない。同時に、ユネスコ世界ジオパークは、地域や国内において地質遺産の保護を推進するために活用されるべきである。
- 8 世界ジオパークの再認定では、これらの基準についてチェックリストを通じて確認する。

2. 伊豆半島ジオパーク基本計画及び行動計画改定の目的

伊豆半島ジオパークは、世界認定に先立って 2015 年（平成 27 年）11 月に世界ジオパークがユネスコの正式なプログラムに認定されたことで、世界ジオパークが目指すべき指針が示されました。

伊豆半島ジオパークは、改めてユネスコ事業としての意義を確認し、今後もユネスコ世界ジオパークとして活動をしていくための指針として、「伊豆半島ジオパーク基本計画」を改定するものです。改定の目的は、次のとおりです。

- 1) ユネスコ事業としての意義の理解、ジオパークの推進目的等を明確に示し、ユネスコ世界ジオパークの目的と意義に沿った活動中で、伊豆半島ジオパークの基本理念を明示し、地域の持続可能な開発を目指すうえでの基本的な考え方や活動の在り方についての総合的な指針となります。
- 2) 様々な実施主体や分野にわたるジオパーク活動の取組みを体系的に整理し、地域の住民や事業者はもとより、観光などで訪れる来訪者や、伊豆半島の豊かな自然、文化、歴史などに関心を寄せて下さる方々にも、ジオパーク活動への理解と賛同を得ながら取り組む内容を明記した計画とします。
- 3) ジオパーク事業を管理・運営する伊豆半島ジオパーク推進協議会（以下「本協議会」という）を構成する団体（民間団体、15 市町、静岡県）間が、認識を共有し、ジオパークの活動計画により、県、市町、事業者、地域住民が、自主的な活動に取り組みながら、伊豆半島の素晴らしさを誇りに思い、住む人、来訪者それぞれが、ジオパークの活動が地域振興に寄与するための計画とします。

3. 伊豆半島ジオパークのこれまでの取り組みの成果と課題

2013 年度（平成 25 年度）からの基本計画及び行動計画にもとづいて世界ジオパークを目指し、ジオガイドの育成やジオツーリズムの推進、来訪者へジオパークの魅力をわかりやすく紹介するパンフレット類の作成、拠点施設や解説板の設置、ジオパーク学習を通じた郷土愛の醸成など、地域における様々な活動が実施され、2018 年（平成 30 年）伊豆半島ジオパークは国内で 9 か所目のユネスコ世界ジオパークの認定を受けました。

2020 年（令和 2 年）秋、日本ジオパーク委員会から示された調査結果報告書では、法人化に向け（一社）美しい伊豆創造センターとの合併に向けた検討がなされていることや認定ジオガイドがスキルアップ講習を通じ教育現場や施設の管理運営、地域におけるジオパーク活動の推進役として活躍していることが評価されています。また予約なしでも参加できるジオツアーも堂ヶ島、石廊崎、浄蓮の滝ほか各地で実施され、予備知識のない訪問者にも気軽にジオパークの魅力を楽しめる企画も評価を受けました。施設についても中央拠点施設であるジオリアに加え、各自治体でのジオパーク活動の拠点となるビジターセンターが 15 か所に設置され、伊豆半島全体でジオパークの認知度向上に役立っていることも評価されました。一方で今後の課題としては、基本計画と行動計画の改定により、持続可能な開発に向けたジオパーク活動に取り組むこと、同じユネスコ世界文化遺産：韮山反射炉との協業、伊豆半島全域でのジオパーク学習の推進、パートナーシップ戦略と協定書締結による協働活動、ジオリア^{注2)}展示の改善と「あまじお」^{注3)}、15 か所のビジターセンターとの連携強化、ジェンダーバランスの改善を求められました。

伊豆半島ジオパークは活動初期から地域住民や民間事業者、学校教育など、地域ごとにそれぞれの特徴を生かした多様な活動を展開しています。現在も推進協議会とジオガイド協会との連携をはじめ住民主体の活動が多数実践されており、「ひと」と地域の「個性」が最大の魅力のジオパークでもあります。構成 15 市町、2027（うち陸域 1585）km²という広範囲に及ぶ伊豆半島ジオパークは、国連が採択した SDGs^{注4)}の理念のもと持続可能な地域づくりのために地域の個性を生かしながら、一方で各関係者と各地域が横断的かつ総合的に協力して活動を推進することが求められます。今回の基本計画の改定を通じて、住

注2) 伊豆半島ジオパークの中央拠点施設。2016 年（平成 28 年）4 月開館。伊豆半島の概要を紹介するジオパークのミュージアム。累計入館者数は 78491 人（2021 年 3 月現在）。

注3) 伊豆市の天城湯ヶ島市民活動センターに設置されている伊豆半島ジオパークの研究拠点。研究室や資料保管庫のほか研究成果の展示室がある。静岡大学と共同で運営している。
2019 年（平成 31 年）4 月開設。

注4) SDGs（Sustainable Development Goals）持続可能な開発目標。2015 年 9 月の国連サミットで採択された 2016 年から 2030 年までの 15 年間で達成するために掲げた目標。17 のゴールと 169 のターゲット目標が示されています。資料編参照。

伊豆半島ジオパーク活動の記録

2010 年 2 月	伊豆半島 6 市 6 町首長会議『伊豆半島ジオパーク構想』の推進を合意
2011 年 3 月	伊豆半島ジオパーク推進協議会設立総会
2011 年 6 月	第 1 回ジオガイド養成講座開催（概ね隔年で開催して現在に至る）
2011 年 7 月	情報発信ツールとして、公式ウェブサイト開設
2011 年 10 月	伊豆市月ヶ瀬小学校でジオ学習（以後各地小中高で実施し現在に至る）
2012 年 4 月	日本ジオパークネットワークへの加盟申請書を提出
2012 年 8 月	伊豆半島ジオ検定スタート（以後毎年実施）
2012 年 8 月	伊豆半島ジオガイド協会発足
2012 年 9 月	日本ジオパークネットワークへの加盟認定
2013 年 10 月	エリア拡大（長泉町・清水町加盟）申請書を提出
2013 年 12 月	日本ジオパーク委員会がエリア拡大の認定（構成市町 7 市 8 町）
2013 年 12 月	基本計画の策定に着手。15 市町市民を対象に WEB アンケート実施
2014 年 1 月	伊豆半島ジオパークの目指す未来の姿を考えるワークショップ開催
2014 年 3 月	世界ジオパークネットワークへの加盟申請書提出
2014 年 6 月	伊豆半島ジオパーク基本計画・行動計画を策定
2015 年 7 月	世界ジオパークネットワークによる現地審査
2015 年 8 月	応援会員制度とサポーター制度創設
2015 年 9 月	世界ジオパークネットワークへの加盟は保留
2015 年 11 月	ジオパークがユネスコの正式プログラムに認定
2015 年 12 月	伊豆半島ジオパーク認知度調査、実施
2016 年 4 月	伊豆半島ジオパークの拠点施設「ジオリア」が開館
2016 年 10 月	第 7 回日本ジオパークネットワーク伊豆半島大会を開催
2016 年 11 月	ユネスコへ世界ジオパーク認定の申請書提出
2017 年 7 月	ユネスコによる世界ジオパーク認定の現地審査
2017 年 7 月	小中学生を対象にジオパーク子ども絵画コンクール開催
2018 年 2 月	ジオカフェ開催（以後定期的に開催）
2018 年 4 月	伊豆半島ジオパークがユネスコ世界ジオパークに認定
2018 年 6 月	エコツーリズム推進全体構想策定に着手
2018 年 12 月	世界ジオパーク認定記念シンポジウムを開催
2019 年 4 月	静岡大学との共同研究拠点施設「あまじお」を整備
2019 年 7 月	伊東沖海底噴火 30 周年記念シンポジウム開催
2019 年 10 月	大相撲巡業ジオパーク伊豆場所（台風のため中止）
2019 年 11 月	インドネシア、チレトゥーパラブハンラトゥユネスコ世界ジオパークとの協力協定を締結
2020 年 9 月	静岡ガスグループと長期パートナーシップ協定を締結
2020 年 11 月	世界遺産である韮山反射炉において共同企画展開催
2021 年 3 月	伊豆半島ジオパーク推進協議会発足 10 年を迎える

民の皆さんをはじめ、様々な関係者によって着実に活動していくことが期待されます。

4. 計画期間

基本計画及び行動計画は伊豆半島ジオパークが目指す方向性を明らかにし、伊豆半島の住民、教育機関、市民団体、地域団体、民間企業、自治体が今後より一層協力しながら、横断的で総合的に伊豆半島ジオパークを推進するための活動指針となる計画です。また、基本計画及び行動計画は伊豆半島を一体的に捉えた長期的視点による地域づくりの方向性を示し、短期・中期的な課題を解決し、地域の振興を図るための戦略計画を明示した「伊豆半島グランドデザイン」の基幹戦略事業として位置づけられます。基本計画及び行動計画の計画期間は 10 年後の伊豆半島のあるべき姿を見据え、2021 年度（令和 3 年度）から 2025 年度（令和 7 年度）までの 5 か年計画とします。行動計画については、社会情勢や関連する法令や計画との整合性を図りながら必要に応じて見直します。

5. 伊豆半島ジオパークが分担し達成する持続可能な開発目標（SDGs）

伊豆半島ユネスコ世界ジオパークはいつまでも住み続けたい、訪れたい、持続可能な地域となることを目指しています。今回の改訂に際して「持続可能な開発目標」の具体的な実践に取り組みながら SDGs の達成に参画するものです。



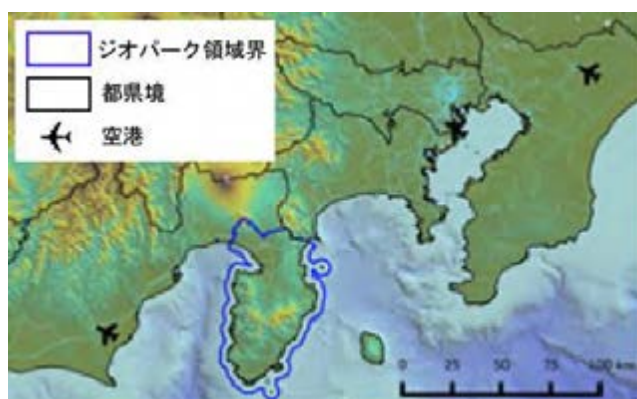
図 1-1 伊豆半島ジオパークが達成すべき SDGs の項目

第2章 伊豆半島ジオパークの概要

1. 伊豆半島ジオパークの名称

伊豆半島は、フィリピン海プレートの上にあった南洋の海底火山の北上と本州への衝突、関連した様々な火山活動と地殻変動によって特徴づけられます。こうして誕生した伊豆半島は、豊かな自然環境や文化、歴史、産業、町、人を次の世代に残していく持続可能な地域づくりを目指します。このため名称は「伊豆半島ジオパーク」とし、ユネスコ世界ジオパークの一員として活動していきます。

2. 伊豆半島ジオパークの位置



伊豆半島ジオパークは北緯34° 32′ 42.4″ ～ 35° 13′ 16.3″ 東経138° 42′ 18″ ～ 139° 12′ 32.4″ の範囲にあり、東京の西南西約 100km に位置します。鉄道を利用すると東京から約 40 分、羽田空港から約 1 時間で訪れることができます。

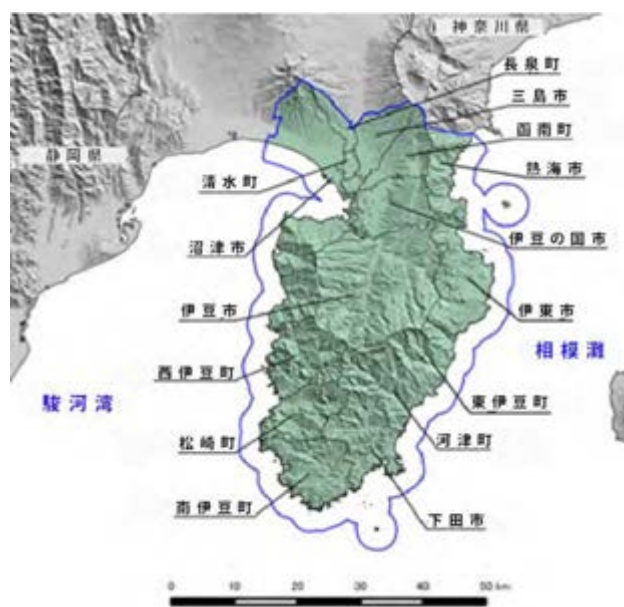


図2-1 伊豆半島ジオパークの位置とエリア

構成市町の陸域と海岸線から 3km の海域をジオパークの範囲に設定しており、ジオパークの北側の境界は行政界で区切られます。伊豆半島ジオパークの境界線は、15 の構成自治体（沼津市、熱海市、三島市、伊東市、下田市、伊豆市、伊豆の国市、東伊豆町、河津町、南伊豆町、松崎町、西伊豆町、函南町、清水町、長泉町）の外形を基本とし、海岸線から 3km までの海域も設定していることから有人島である初島（熱海市）や最南端の神子元島（下田市）も含む範囲です。（図2-1）

3. 伊豆半島ジオパークの面積

ジオパークの面積は約 2027（陸域は約 1585）km² あります。これは、フィリピン海プレート^{注5}の北上に伴い本州に衝突した地質体としての「伊豆」と、文化圏・観光圏としての「伊豆」とほぼ一致します。

4. 伊豆半島ジオパークの地質の概要



図 2-2 伊豆半島の大地の成り立ちの歴史

4-1 南からやってきた火山の島

伊豆半島が特異な地質を持つ背景は、この地域が本州で唯一フィリピン海プレート上に位置し、かつては火山島であったことを示す様々な証拠からひも解くことができます。伊豆半島ジオパークの大地の基盤をつくっているのは、およそ 200 万年以上に海底火山の噴火で堆積した火山灰や溶岩を主体とした地層で、それらはおもに伊豆半島の南部地域で見ることができます。また、この時代の地層からは暖かい南洋の海に生息した貝やサンゴなどの化石が見つかります。これらはかつて伊豆が今よりも南の地域にあり、プレートの動きにともなって現在の位置まで移動してきたことを示しています。

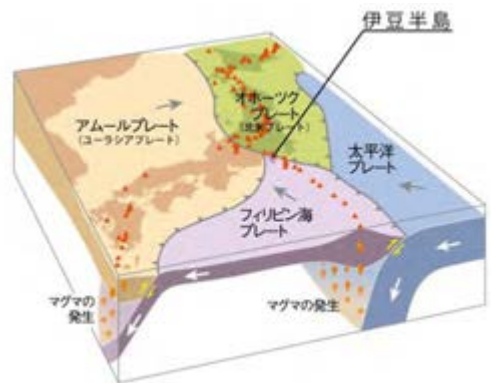


図 2-3 日本列島周辺のプレートの位置関係。赤色の三角形は活火山の位置を示している。

4-2 全域が火山の博物館



図 2-4 草原に覆われた大室山。4000 年前の噴火で形成された。

特異な生い立ちをたどった伊豆半島は、過去 2000 万年間にわたって繰り返し火山活動を起こしてきた“天然の火山博物館”です。海底で噴出した枕状溶岩の断面や降り積もった火山灰の地層を陸上で観察できる世界でも珍しい場所です。また国内で唯一、複成火山^{注5}と独立単成火山群^{注6}の両方が一つの地域で見られ、

注 5) 同じ場所で何度も噴火を繰り返し、溶岩や火山灰を降り積もらせて大きな火山に成長する。

注 6) 単成火山群では、一連の噴火活動を終わると次の活動を別の場所で起こすため、ある範囲に小さな火山の集まりが作られます。日本には 3 つのみ単性火山群が存在しています。

異なるタイプの火山が活動することで変化に富んだ地形・景観を生み出しています。中でも伊豆半島を代表する景観となっているのが、大室山や城ヶ崎海岸などの伊豆東部火山群に含まれる単成火山です。伊豆半島の東部地域を中心に、数十以上の小さな火山があります。大室山のスコリア丘^{注7)}や一碧湖のマール^{注8)}などは火山噴火の仕組みを学べるだけでなく、景勝地としても貴重です。

火山活動による高温の熱は伊豆に各種の鉱床や温泉という恵みをもたらしました。土肥金山の金や銀、宇久須鉱山の珪石が有名ですが、かつては半島各地で金・銀・銅やマンガンなどが採掘されていました。また伊豆半島には熱海や伊東温泉など国内有数の温泉地を抱えています。こうした温泉は地下に残るマグマの“余熱”によって地下水が温められたものです。



図2-5 摂氏100度超の蒸気
と熱湯が吹き上がる峰温泉大
噴湯

4-3 衝突がもたらす地質多様性

伊豆半島の世界的唯一性は、活動的火山弧同士の衝突とそれにとまなう現象が現在も進行していることです。このため、活発な地殻変動によって多数の活断層が形成され、北伊豆地震(1930年;昭和5年)や伊豆半島沖地震(1974年;昭和49年)など大きな被害をもたらした地震が繰り返されてきました。また半島の東西両側にはプレートの沈み込み境界があり、およそ100年から200年の間隔で巨大地震に見舞われ、沿岸地域では津波による被害に度々襲われてきました。ジオパークではこうした災害の悲劇を後世へ伝えていくために災害サイトという項目を設定し、丹那断層公園などを指定しています。



図2-6 石組みの水路が丹那断層
点線を境に地面が食い違っている。

注7) マグマのしぶきが固まったスコリアや火山弾などが火口の周りに降り積もってできる小山。

注8) 水蒸気爆発またはマグマ水蒸気爆発によってできた円形の火口のこと。窪みに水がたまって池や湖が作られることがある。

5. 伊豆半島ジオパークの自然地理の概要

伊豆半島には登録されている天然記念物のうち、植生や生態、野生動物について、国指定が 11 件、県指定が 32 件、市町指定が 63 件あります^{注9)}。

伊豆半島は沿岸を黒潮が流れることから北緯 35 度の緯度としては温暖な気候に恵まれていて、例えば南端の石廊崎では年平均気温は 16.6℃（1981-2010 年平均）に達します。そのため暖温帯の南方系の植生の北限地になっていることが多くあります。沼津市の大瀬崎にあるビャクシンは群生地として北限に位置します。このほかにも複数のシダ類の北限地になっています。一方、中央山地の天城山は年降水量 4000 mm に達する多雨地であり、多様な自然環境の源でもあります。この天城山の山稜部のブナやヒメシャラの森は国立公園の特別保護地区に指定されています。またブナについては函南町の原生林が江戸時代から禁伐の森として保護されてきました。現在より気温が 6～7℃ 低かった氷河期には寒冷地を好むブナは伊豆半島に広がっていたが、氷河期後の気温上昇によって標高 700 m 以上の天城山や函南の森に追いやられ、残存している原生の森です。

海にも伊豆の自然の特徴がよく表れていて、沼津市の内浦湾はサンゴ（エダミドリイシ）の北限地となっているほか、プレート沈み込み帯の駿河湾には多数の深海魚が生息しており、世界最大の節足動物であるタカアシガニも生息しています。



図 2-7 大瀬崎のビャクシン



図 2-8 天城山のブナ原生林

6. 伊豆半島ジオパークの人文地理の概要

6-1 人口

伊豆半島に位置する 15 市町で構成される伊豆半島ジオパークは人口約 66.7 万人、世帯数約 31.2 万世帯の地域です（表 2-1）。伊豆半島の人口は北部の都市化が進んだ平野部への集中と、山間部や沿岸など居住域が限定される中南部での偏在という特徴があ

注 9) 天然記念物指定による自然遺産リストは資料編参照。

ります。人口動態を見ると長泉町は人口が増加していますが、それ以外の14市町は人口が減少傾向にあります。一方高齢化率を見ると、西伊豆町の48.5%が最も高く、次いで熱海市(45.5%)、南伊豆町(44.1%)となっており、静岡県 averages (28.2%)と比較すると、伊豆半島は静岡県の中でも高齢化が進む地域です。

6-2 経済・産業

伊豆半島の経済全体をみるとサービス経済に依存していますが、その内実は北部と中南部では地域経済のあり方が異なります。

北部は化学繊維、製紙・パルプ、電気機械などの工場経済および都市経済が発達しています。一方中南部は第三次産業が卓越しており、その中でも医療・福祉サービス、観光サービスが発達する地域です。

表2-2に示した産業大分類別の就業者で見ると、北部5市町(沼津市、三島市、函南町、清水町、長泉町)では第二次産業における就業者が約6万人(29.2%)であるのに対し、その他14市町合計では約2万人(16.8%)です。日本全体(25.0%)と比べても北部5市町では第二次産業での就業者割合が大きく、工場経済が発達しています。第三次産業を見ると熱海市(85.2%)、東伊豆町(80.4%)、伊東市、下田市(80.3%)となっており、日本全体(71.0%)と比較しても高い割合を示します。

表2-2 市町別の伊豆半島ジオパークにおける産業別就業者数(2015年)

	全就業者数		第1次産業		第2次産業		第3次産業		分類不能	
	人		人	割合(%)	人	割合(%)	人	割合(%)	人	割合(%)
沼津市	96,826		2,516	2.6	28,739	29.7	60,766	62.8	4,805	5.0
熱海市	16,566		265	1.6	2,045	12.3	14,120	85.2	136	0.8
三島市	54,290		1,240	2.3	14,532	26.8	36,726	67.6	1,792	3.3
伊東市	30,836		789	2.6	3,966	12.9	24,762	80.3	1,319	4.3
下田市	10,453		568	5.4	1,349	12.9	8,395	80.3	141	1.3
伊豆市	15,798		1,197	7.6	3,539	22.4	10,786	68.3	276	1.7
伊豆の国市	24,009		1,433	6.0	6,043	25.2	15,925	66.3	608	2.5
賀茂郡東伊豆町	6,243		510	8.2	692	11.1	5,022	80.4	19	0.3
賀茂郡河津町	3,598		469	13.0	486	13.5	2,639	73.3	4	0.1
賀茂郡南伊豆町	3,620		344	9.5	468	12.9	2,794	77.2	14	0.4
賀茂郡松崎町	3,126		222	7.1	531	17.0	2,350	75.2	23	0.7
賀茂郡西伊豆町	3,616		189	5.2	683	18.9	2,741	75.8	3	0.1
田方郡函南町	18,336		688	3.8	5,080	27.7	12,344	67.3	224	1.2
駿東郡清水町	16,174		166	1.0	4,952	30.6	10,452	64.6	604	3.7
駿東郡長泉町	21,092		421	2.0	7,107	33.7	12,622	59.8	942	4.5
伊豆半島ジオパーク全体	324,583		11,017	3.4	80,212	24.7	222,444	68.5	10,910	3.4

(平成27年度国勢調査により作成)

表2-1 市町別の伊豆半島ジオパークの人口と世帯数(2019年)

	人口	世帯
沼津市	195,039	91,624
熱海市	36,848	21,496
三島市	109,965	49,145
伊東市	68,861	35,292
下田市	21,492	10,786
伊豆市	30,678	13,390
伊豆の国市	48,686	21,234
賀茂郡東伊豆町	12,162	6,221
賀茂郡河津町	7,228	3,325
賀茂郡南伊豆町	8,268	3,904
賀茂郡松崎町	6,602	2,967
賀茂郡西伊豆町	7,872	3,787
田方郡函南町	37,722	16,266
駿東郡清水町	32,510	14,023
駿東郡長泉町	43,523	18,196
伊豆半島ジオパーク全体	667,456	311,656

(平成31年3・4月住民基本台帳各市町版により作成)

6-3 観光

表 2-3 観光客の消費単価（2018 年）

	宿泊客		日帰り客	
	県外客 (円)	県内客 (円)	県外客 (円)	県内客 (円)
総額	31895	21364	3380	8788
交通費	7665	2564	698	2973
宿泊費	13534	11472	-	-
飲食費	4513	3105	921	1606
買い物・土産	4674	3042	1384	3751
入場・施設利用料	1290	1064	312	432
その他	212	117	64	27

（平成30年度静岡県観光交流の動向より作成）

伊豆半島は年間約 4000 万人が訪れる観光地であり、首都圏在住者による短期滞在型観光地という性格を持ちます。観光客の動態について宿泊客数の推移から見ると、1991 年（平成 3 年）の約 2000 万人をピーク

に宿泊客数は減少し、2008 年（平成 20 年）には約 980 万人と最も少なくなりましたが、それ以降微増傾向にあり 2017 年（平成 29 年）に約 1100 万人にまで回復しました（図 2-9）。「平成 30 年度静岡県における観光の流動実態と満足度調査」によると、伊豆半島を訪れる観光客の 63.7%が関東からの自家用車を利用した訪問でした。観光客一人あたりの消費金額を見ると、交通費、宿泊費、飲食費、買い物・土産物が占める割合が高く、一方で、入場・施設利用料やその他の消費金額が低くなっています（表 2-3）。

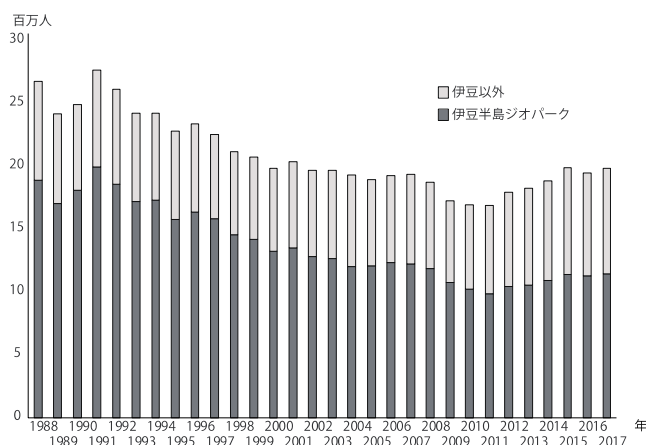


図 2-9 静岡県および伊豆半島ジオパーク管内における宿泊客数の推移（1988-2017 年）

静岡県観光統計により作成

6-4 農林水畜産業

伊豆半島は山間部が多く、北部の田方平野を除くと稲作に適した地域は限られています。地域ごとの特徴的な農産品としては、箱根南西麓斜面では火山灰土の上で根菜類やスイカが生産されておりブランド野菜となっています。半島北部の海に面した斜面では、柑橘の栽培が盛んです。また、丹那盆地や西天城高原では酪農がおこなわれています。温暖な気候のもと花卉や温泉熱を利用したメロンの栽培もあります。天城山は豊富な湧き水に恵まれています。130 年前に伊豆で開発された「畳石式」というわさび栽培方式は今日までその伝統が継承され、また肥料や農薬をほとんど使わない農法から、2018 年（平成



図 2-10 伊豆半島における代表的農業景観

30 年) に世界農業遺産「静岡水わさびの伝統栽培」に認定されました。代表的産地はわさび栽培特有の景観からジオパークの生態サイトにも指定しています(24 ページ参照)。

プレートの沈み込みによる駿河湾と相模湾という深い湾に挟まれた伊豆半島は、沿岸から近距離で多様な魚種に恵まれています。西海岸の沼津市戸田では駿河湾の深海に棲む世界一大きな蟹、高足蟹漁が、東海岸では水深 200m 以深に生息する金目鯛漁が行われています。このほか沿岸の藻類を採取するてんぐさの生産も本邦有数です。

6-5 歴史

伊豆半島における人々の生活の痕跡は 3 万 7 千年前の中期旧石器時代まで遡ります。狩猟など食物採集が中心であった旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡は、愛鷹山麓や箱根西麓などの丘陵地などに多く分布し、神津島産の黒曜石が多数発見されています。古墳時代の遺跡としては柏谷横穴群、江間横穴群などが発見されています。飛鳥時代には三島や沼津を中心に条里制が敷かれ、現在の田方平野の農地区画や道路などの基本的な構造が形成されました。平治の乱で伊豆へ配流となった源頼朝の旗揚げや、幕末に下田条約が結ばれたことでも有名な伊豆には、頼朝が約 20 年間を過ごしたと言われる「蛭ヶ小島」、北条政子生誕地である「願成就院」、江戸時代末期に大砲製造が行われ、現在もほぼ完全な形で残る「韮山反射炉」、我が国初の米国総領事館となった「玉泉寺」など、数多くの文化財が残されています。



図 2-10 伊豆半島における代表的歴史的景観（左：柏谷横穴群、中：願成就院、右：ペリーロード）

第3章 伊豆半島ジオパークのサイト

1. サイト区分の見直し

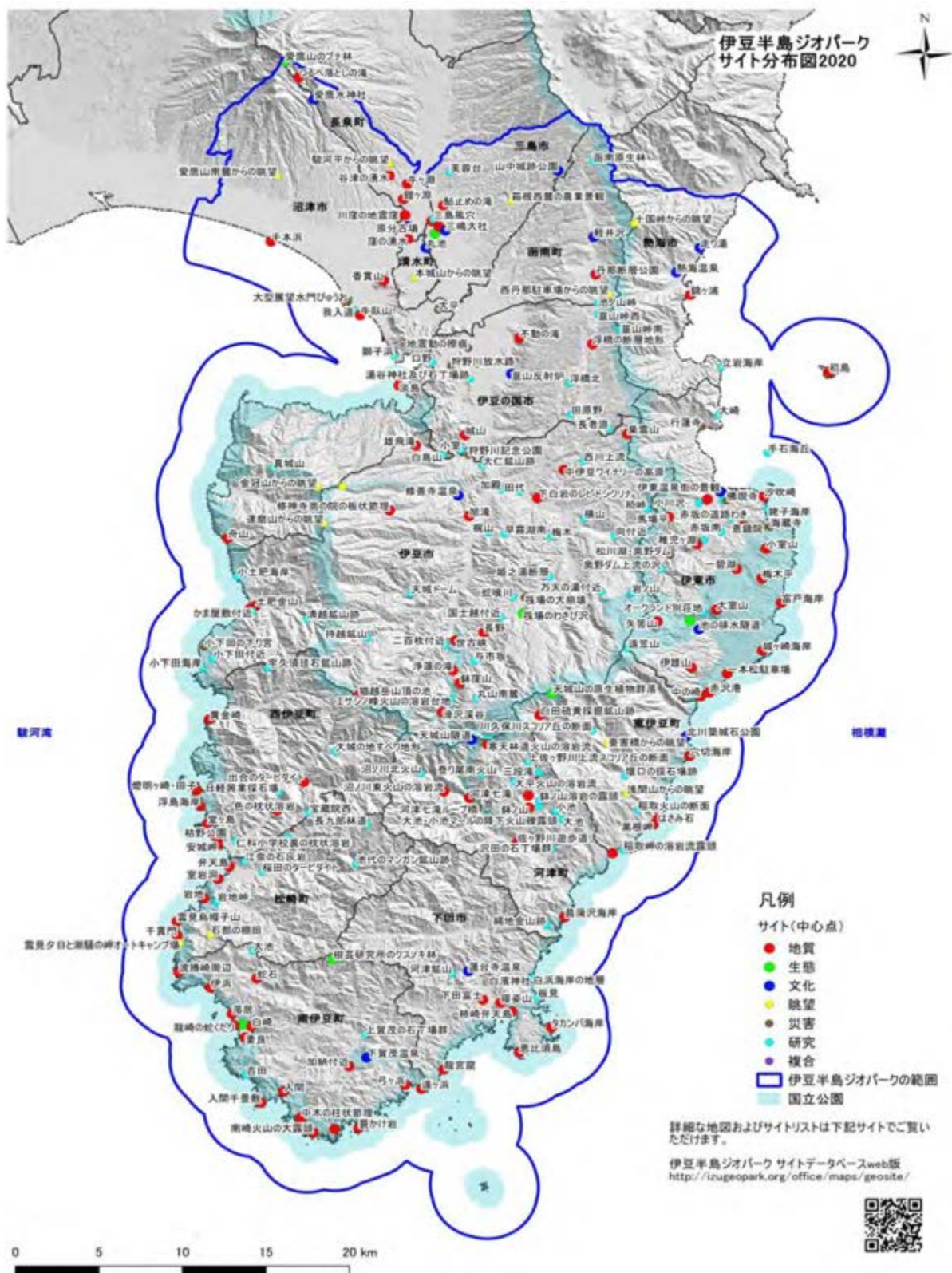
伊豆半島ジオパークでは、これまで「エリア」「ジオサイト」「ジオポイント」のように階層化を行ってきました。その後、世界ジオパーク審査員の指摘に基づき2019年に階層化を廃止し「サイト」のみでジオパークの資産を整理しました。サイトは、「ジオサイト (Geosite)」「生態サイト (Ecological site)」「文化サイト (Cultural site)」を基本とし、伊豆半島の特徴を反映するべく、独自に「眺望」「災害」「研究」の3つのサイト種を加えました。なお研究サイトは学術研究が行われたサイトについて記録することが目的であり、利用したり公開したりするものではありません。またサイトの指定については利用や保護・保全の実態、価値の見直しを行って、中期的に見直しを実施していきます。

ジオサイト：地質/地形的価値を主とするサイト	ユネスコ ガイドライン
生態サイト：生態価値を主とする場所	
文化サイト：文化的価値を主とする場所	

眺望サイト：その場所そのものに特別な価値はないが、眺望地点として価値のある場所	独自 基準
災害サイト：災害に関連した場所 災害遺構や災害記念碑、防災施設など	
研究サイト：学術的価値を有するが、通常アクセスや理解が困難な場所 (原則的に公開しない)	
ひとつのサイトが上記区分の複数を有する場合があります（「複合サイト」）	

サイトの種別		サイト数		
ジオサイト		94		
文化サイト		18		
生態サイト		5		
眺望サイト		13		
災害サイト		13		
研究サイト		93		
複合サイト	地質/災害	1	計 31	全 268 サイト 「地質サイト」 (いわゆるジオサイ ト) は 122 サイト
	地質/生態	12		
	地質/生態/文化	1		
	地質/生態/文化/災害	1		
	地質/生態/文化/眺望	1		
	地質/眺望	1		
	地質/文化	11		
	眺望/生態	1		
	眺望/文化	1		
	文化/災害/眺望	1		

2. サイト分布図



3. サイトリスト

表 伊豆半島ジオパークのサイトリスト(2020年5月時点)

ID	分類	名前	市町	概要	価値 (校)	解説板 ト掲載	科学的 価値	教育 利用	観光 利用	その他
1	地質	大東山の断崖	伊豆市	伊豆半島・馬場平スコリア層	1	0	○	○	○	○
2	地質	城星火口	伊豆市	城星火口			○	○	○	○
3	地質	沙吹崎	伊豆市	伊豆半島の海岸線・遊食台と波食層・遊食台と波食層・遊食台と波食層の公園	5	0	○	○	○	○
4	地質	小室山	伊豆市	小室山スコリア丘・伊豆高原の景観、溶岩流の地形、	2	0	○	○	○	○
5	地質	一碧湖	伊豆市	一碧湖マールの景観、大室山溶岩流先頭としての十二連島	1	0	○	○	○	○
6	地質	富戸海岸	伊豆市	大室山の溶岩流と柱状節理、伊豆半島の海岸線	5	0	○	○	○	○
7	地質	城ヶ崎海岸	伊豆市	大室山の溶岩流	1	0	○	○	○	○
8	地質	伊豆山	伊豆市	伊豆山スコリア丘の地形、山頂からの景観	1	0	○	○	○	○
9	地質	一本松駐車場	伊豆市	伊豆山溶岩流の地形と断面			○	○	○	○
10	地質	赤沢港	伊豆市	伊豆山溶岩流の地形と断面			○	○	○	○
11	地質	中の崎	伊豆市	伊豆山溶岩流の地形と断面			○	○	○	○
12	地質	馬場平	伊豆市	伊豆山溶岩流の地形と断面			○	○	○	○
13	地質	梶原ヶ崎	伊豆市	伊豆山溶岩流の地形と断面			○	○	○	○
14	地質	大室山	伊豆市	大室山スコリア丘の地形、山頂からの景観、岩室山溶岩ドーム	5	0	○	○	○	○
15	地質	矢野山	伊豆市	大室山・矢野山溶岩ドームの地形と岩石、湧水の利用	1	0	○	○	○	○
16	地質	梅本平	伊豆市	梅本平・梅本火山の地形と湧出物	2	0	○	○	○	○
17	地質	城山	伊豆市	城山の地形と断面の景観			○	○	○	○
18	地質	浮橋の断崖地形	伊豆市	浮橋の断崖地形			○	○	○	○
19	地質	不動の滝	伊豆市	不動の滝			○	○	○	○
20	地質	赤雲山	伊豆市	赤雲山の地形と断面			○	○	○	○
21	地質	旭海	伊豆市	旭海の地形と断面			○	○	○	○
22	地質	修善寺奥の段の断崖地形	伊豆市	修善寺奥の段の断崖地形			○	○	○	○
23	地質	下白地のレドングリナ	伊豆市	下白地のレドングリナ			○	○	○	○
24	地質	中伊豆ワイナリーの高原	伊豆市	中伊豆ワイナリーの高原			○	○	○	○
25	地質	世古峠	伊豆市	世古峠			○	○	○	○
26	地質	浄蓮の滝	伊豆市	浄蓮の滝			○	○	○	○
27	地質	鉢淵山	伊豆市	鉢淵山の地形と断面			○	○	○	○
28	地質	清沢溪谷	伊豆市	清沢溪谷			○	○	○	○
29	地質	長野	伊豆市	長野			○	○	○	○
30	地質	土肥金山	伊豆市	土肥金山			○	○	○	○
31	地質	霧州天正金鉱	伊豆市	霧州天正金鉱			○	○	○	○
32	地質	越前川	伊豆市	越前川			○	○	○	○
33	地質	根山のタービダイト	伊豆市	根山のタービダイト			○	○	○	○
34	地質	根山のタービダイト	伊豆市	根山のタービダイト			○	○	○	○
35	地質	カンナハ海岸	伊豆市	カンナハ海岸			○	○	○	○
36	地質	恵比須島	伊豆市	恵比須島			○	○	○	○
37	地質	下田富士	伊豆市	下田富士			○	○	○	○
38	地質	下田富士	伊豆市	下田富士			○	○	○	○
39	地質	根崎井天島	伊豆市	根崎井天島			○	○	○	○
40	地質	龍宮窟	伊豆市	龍宮窟			○	○	○	○
41	地質	沼ノ川東火山の溶岩流	伊豆市	沼ノ川東火山の溶岩流			○	○	○	○
42	地質	東天林道火山の溶岩流	伊豆市	東天林道火山の溶岩流			○	○	○	○
43	地質	河津七滝	伊豆市	河津七滝			○	○	○	○
44	地質	鉢ノ山	伊豆市	鉢ノ山			○	○	○	○
45	地質	鉢ノ山	伊豆市	鉢ノ山			○	○	○	○
46	地質	佐々野川遊歩道	伊豆市	佐々野川遊歩道			○	○	○	○
47	地質	藤澤沢滝	伊豆市	藤澤沢滝			○	○	○	○
48	地質	三段滝	伊豆市	三段滝			○	○	○	○
49	地質	白濁公園と遊池	伊豆市	白濁公園と遊池			○	○	○	○
50	地質	三島野北口の溶岩	伊豆市	三島野北口の溶岩			○	○	○	○
51	地質	鮎止めの滝	伊豆市	鮎止めの滝			○	○	○	○
52	地質	井天島	伊豆市	井天島			○	○	○	○
53	地質	室岩洞	伊豆市	室岩洞			○	○	○	○
54	地質	雲見島帽子山	伊豆市	雲見島帽子山			○	○	○	○
55	地質	十貫門	伊豆市	十貫門			○	○	○	○

表 伊豆半島ジオパークのサイトリスト表(2020年5月時点)

ID	分類	名前	市町	概要	価値	解説板 (枚)	リーフレット 掲載	科学的 価値	教育 利用	観光 利用	その他
56	地質	岩地	松崎町	海底火山の軽石層と美しい入り江		1					
57	地質	千本浜	沼津市	砂嘴の景観		1					
58	地質	沼津山	沼津市	海岸の崖に見られる海底溶岩ドームの断面、大御神社と日蓮の津波祈禱伝承		1	〇		〇	〇	
59	地質	沼津山	沼津市	火山の地の景観		1	〇		〇	〇	
60	地質	香貫山	沼津市	沼津周辺の地形と景観、海底火山の噴出物		1			〇	〇	
61	地質	舟山	沼津市	連座火山の溶岩流、舟山集落の地形		1			〇	〇	
62	地質	船山の滝	沼津市	三島溶岩の断面、溶岩樹型、ローマ橋		2			〇	〇	
63	地質	一色の柱状溶岩	西伊豆町	仁科層群の柱状溶岩、岩脈	国際	2			〇	〇	
64	地質	黄金崎	西伊豆町	黄金崎の景観と変質岩、岩脈、鉱石	国内	2			〇	〇	
65	地質	浮島海岸	西伊豆町	重機岩脈群	国内	2			〇	〇	
66	地質	室ヶ島	西伊豆町	三十四郎島とトンボロ現象、海底火山灰と軽石、海食洞	国際	2			〇	〇	
67	地質	沢田公園	西伊豆町	白岩の壁面、海底火山の土石流と軽石	国際	2			〇	〇	
68	地質	結野公園	西伊豆町	海底火山の溶岩流、土石流と同重値	国際	4			〇	〇	
69	地質	安城崎	西伊豆町	海底火山の噴出物と軽石	国際	1			〇	〇	
70	地質	燈明ヶ崎・田子	西伊豆町	海底火山の断面					〇	〇	
71	地質	出合のターゼダイト	西伊豆町	火山反乱溶岩と微化石					〇	〇	
72	地質	窪の湧水	西伊豆町	真瀬川の扇状地内の湧水と御殿場泥流		1			〇	〇	
73	地質	鐘ヶ瀬	長泉町	三島溶岩にかかる滝		1			〇	〇	
74	地質	牛ヶ瀬	長泉町	三島溶岩にかかる滝		1			〇	〇	
75	地質	谷津の湧水	長泉町	三島溶岩にかかる滝		1			〇	〇	
76	地質	つるべ落しの滝	長泉町	学校敷地で利用されている愛鷹火山の溶岩にかかる滝		1			〇	〇	
77	地質	黒坂崎	東伊豆町	板状節理の発達した愛鷹火山の溶岩にかかる滝		1			〇	〇	
78	地質	はさみ石	東伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
79	地質	天城火山の溶岩流露頭	東伊豆町	天城火山の溶岩流と板状節理、岩脈、石丁場					〇	〇	
80	地質	白切海岸	東伊豆町	白田硫黄鉱山跡と鉱石					〇	〇	
81	地質	穴崎海岸	東伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
82	地質	波崎海岸	東伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
83	地質	蛇石	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形		1			〇	〇	
84	地質	伊豆	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
85	地質	黒岩	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
86	地質	善良	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
87	地質	白崎	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
88	地質	龍崎の蛇ぐたり	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
89	地質	入間千畳敷	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
90	地質	中木の柱状節理	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
91	地質	石崎海岸	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
92	地質	南崎火山の大露頭	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
93	地質	加納付近	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
94	地質	弓ヶ浜	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
95	地質	達ヶ浜	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
96	地質	湯ヶヶ浜	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
97	地質	鶴ヶ浦	南伊豆町	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
98	地質	熱海市	熱海市	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
99	地質	丹那新橋公園	熱海市	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
100	地質	丹那新橋公園	熱海市	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
101	地質	熱海市	熱海市	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
102	地質	伊豆市	伊豆市	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
103	地質	伊豆市	伊豆市	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
104	地質	伊豆市	伊豆市	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
105	地質	伊豆市	伊豆市	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
106	地質	伊豆市	伊豆市	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
107	地質	伊豆市	伊豆市	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
108	地質	伊豆市	伊豆市	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
109	地質	伊豆市	伊豆市	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	
110	地質	伊豆市	伊豆市	天城火山の溶岩流と浸食地形					〇	〇	

表 伊豆半島ジオパークのサイトリスト(2020年5月時点)

ID	分類	名前	市町	概要	価値	解説板 (枚)	リーフレット 掲載	科学的 価値	教育 利用	観光 利用	その他
111	地質/生態	細野高原	東伊豆市	土石流と温泉の関係		2	0				
112	地質/生態	シラスの池	東伊豆市	地すべりがつくった池と自然環境、モリアガエル産卵地							
113	地質/生態	ユウスゲ公園	南伊豆市	南伊豆の地形とそこからの景観		1	0				
114	地質/生態/文化	水島山	伊豆の国市	狩野川の景観と水産地としての小山		1	0				
115	地質/生態/文化/災害	戸田・御浜沖	沼津市	砂嘴の地形、深海生物群、ダイアナ号、達磨火山の溶岩流、イヌマキの森		3	0				
116	地質/生態/文化/眺望	葛城山	伊豆の国市	火山の相の地形と周囲の景観、山麓の果樹園		2	0				
117	地質/眺望	西天城高原	西伊豆市/伊豆市	火山の相の地形と周囲の景観		1					
118	地質/文化	富戸の森(コウ山)	伊豆市	大室山の溶岩と土壌利用、平久須方面の景観、石丁場遺跡		1					
119	地質/文化	御石ヶ沢(ナコウ山)	伊豆市	半佐美火山の溶岩と栗城石丁場		1					
120	地質/文化	北江間横穴群	伊豆の国市	北江間横穴群と海底火山灰層		1	0				
121	地質/文化	峰の大噴湯公園	河津町	大噴湯と峰温泉		1	0				
122	地質/文化	栗井瀬	三島市	三島溶岩の表面、湧水		1	0				
123	地質/文化	割腹塚稲荷神社	長泉町	三島溶岩の溶岩流		1	0				
124	地質/文化	手石砂地	南伊豆市	海底火山の噴出物と海食洞		1	0				
125	地質/文化	子浦三十三観音	南伊豆市	海底火山の噴出物と石仏		1	0				
126	地質/文化	石廊崎	函南町	海底火山の浸食地形とそれを利用した神社		1	0				
127	地質/文化	火宮神社	函南町	海底火山の浸食地形とそれを利用した神社		1	0				
128	地質/文化	柏谷横穴群	伊豆市	北伊豆地層時の遺構と断層のずれ、田代谷の地形		1	0				
129	生態	池谷地の里山景観	伊豆市	新根火山の火砕流台地と、そこに彫られた横穴遺跡		1	0				
130	生態	牧場のわさび沢	伊豆市	池谷地の景観と歴史、矢野山・孔ノ山・台ノ山溶岩ドームの景観		1	0				
131	生態	天城山の原生植物群落	伊豆市	カワゴ平溶岩流がもたらす湧水とわさび沢		1	0				
132	生態	源兵衛川	伊豆市	天城山麓の国立公園特別保護地区		1	0				
133	生態	愛鷹山のブナ林	三島市	三島溶岩の表面、湧水		1	0				
134	生態	樹霊研究所のクスノキ林	長泉町	貴重なブナ林		1	0				
135	生態	伊東温泉街の景観	南伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
136	生態	伊東温泉街の景観	南伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
137	文化	池の排水設備	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
138	文化	重山反射炉	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
139	文化	修善寺温泉	伊豆の国市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
140	文化	天城山公園	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
141	文化	白清神社	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
142	文化	蓮台寺温泉	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
143	文化	観音山石仏群	伊豆の国市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
144	文化	三嶋大社	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
145	文化	山中城跡公園	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
146	文化	丸池	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
147	文化	原分古墳	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
148	文化	愛鷹神社	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
149	文化	北川東城石公園	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
150	文化	下置花温泉	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
151	文化	走り湯	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
152	文化	熱湯温泉	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
153	文化	経井沢	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
154	文化/災害/眺望	下田市街	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
155	眺望	達磨山からの眺望	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
156	眺望	だるま山高原レストハウスからの眺望	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
157	眺望	持越西麓の農業景観	伊豆市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
158	眺望	石新の郷田	三島市	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
159	眺望	雲見夕日と潮騒の岬オーソートキャンプ場	松崎町	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
160	眺望	雲見夕日と潮騒の岬オーソートキャンプ場	松崎町	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
161	眺望	雲見夕日と潮騒の岬オーソートキャンプ場	松崎町	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
162	眺望	雲見夕日と潮騒の岬オーソートキャンプ場	松崎町	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
163	眺望	雲見夕日と潮騒の岬オーソートキャンプ場	松崎町	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				
164	眺望	雲見夕日と潮騒の岬オーソートキャンプ場	松崎町	樹霊研究所のクスノキ林		1	0				

表 伊豆半島ジオパークのサイトリスト総(2020年5月時点)

ID	分類	名前	市町	概要	価値	解説板 (枚)	リーフレット 掲載数	科学的 価値	教育 利用	観光 利用	その他
165 眺望		裏書橋からの眺望	東伊豆町	峡谷とそれをつくる岩体						○	
166 眺望		西丹新庄集場からの眺望	函南町	丹那断層と丹那・田代盆地の地形、富士・箱根・駿河火山の地形景観		1	○	○	○	○	
167 眺望		十国峠からの眺望	函南町	丹那断層と田代盆地の地形、富士・箱根・駿河・天城火山などの地形景観		1	○		○	○	
168 眺望/生観		天神原	南伊豆町	蛇石火山の地形と土地利用		1				○	
169 眺望/文化		オラツチエ	函南町	丹那盆地の地形、丹那トンネル工事を契機とした麓麓への転換			○			○	○
170 災害		行通寺	伊東市	津波跡・津波高標石					○	○	
171 災害		徳現寺	伊東市	津波跡					○	○	
172 災害		海蔵寺	伊東市	津波高標石					○	○	
173 災害		恵徳院	伊東市	津波跡					○	○	
174 災害		松川湖・奥野ダム	伊東市	周囲の地形、ダムと地域社会		2			○	○	
175 災害		地震動の痕跡	伊豆の国市	地震動の痕跡		1		○	○	○	
176 災害		狩野川放水路	伊豆の国市	狩野川放水路、狩野川資料館		1	○		○	○	
177 災害		狩野川記念公園	伊豆市	狩野川記念公園と狩野川台風、熊坂付近の地形					○	○	
178 災害		谷場の大崩壊	伊豆市	狩野川台風の崩壊跡、カワゴ平火山のラハール					○	○	
179 災害		小下田の下り宮	伊豆市	津波による高台移転					○	○	
180 災害		河津七滝ループ橋	河津町	伊豆大島近海地震のがけ崩れがきっかけとなって整備された橋					○	○	
181 災害		大型展望水門びゅうお	沼津市	「びゅうお」を始めとする津波対策施設、展望台からの景観		2	○		○	○	
182 災害		大平	沼津市	河川改修跡、大平地区の景観と大平年代記、多賀火山・箱根火山の地形景観					○	○	
183 災害		川窪の地震窪	沼津市	安政東海地震の陥没跡					○	○	

4. 代表的なジオサイト

堂ヶ島：海底火山

湯ヶ島層群の上位を覆う白浜層群（中新世後期～鮮新世）は火山弧周辺の浅瀬で生じた海底火山の噴火によって堆積した地層であり、海底火山の噴火を示す様々な相層によって特徴づけられます。

西伊豆町の堂ヶ島周辺には噴火に伴う水底土石流や、その上に降り積もった軽石・火山灰層、海底を流れた水冷破碎溶岩^{注10)}が広く分布し、海岸の崖に連続的に露出します。噴火年代や層序、堆積環境が特定されたことで海底火山の噴火・堆積様式に関する国際的研究が多くなされてきました。堂ヶ島海岸南部では水底土石流の最上部はそのまま斜交層理^{注11)}の発達した凝灰岩層に漸移するため、一連の火山活動だったことが分かっています。またこれらの地層内には、急冷縁^{注12)}を有する火山弾も含まれています。こうした研究上の好条件は、海底の爆発的噴火に関する初期の考え方の構築に貢献しました。



図3-1 堂ヶ島

大室山：活動中の単成火山群

本州への衝突、半島化後の伊豆では、陸成の大型火山を形成する噴火が繰り返されましたが、およそ15万年前からは日本列島では珍しい独立単成火山群（伊豆東部火山群）の活動が始まり、それが現在まで継続しています。

大室山は約4000年前の噴火で作られた伊豆東部火山群で最大のスコリア丘です。山頂からは伊東市内に分布する多くの火山やそれらの噴出物がつくった地形を眺望でき、単成火山群の広がりを感じます。



図3-2 大室山

大室山の噴火では大量の溶岩が流れ出し、なだらかな伊豆高原をつくり出しました。また相模湾に達した溶岩は複雑な海岸線の城ヶ崎海岸を作りました。大室山は毎年行われて

注10) 高温の溶岩が水中に噴出すると、接触部分は急激に冷やされて粉々に砕け、角張った岩の集まりとなることがあります。こうしてできた岩の塊を水冷破碎溶岩と称します。

注11) 水の流れなどによって堆積物が移動することで作られる成層構造。地層ができた当時の水流の速さや向きを読み取ることができます。

注12) 高温のマグマや溶岩において、岩体の中心部に比べて外側のほうが急速に冷えたためにガラス質や細粒になった部分のこと。

きた山焼きによってお椀を伏せたような美しい山の形が保たれており、山全体が国指定の天然記念物になっています。



図 3-3 左上に大室山と右下に城ヶ崎海岸

丹那断層：現在も続く地殻変動と活断層

伊豆の本州への衝突後、伊豆半島の南北圧縮によって伊豆半島全体に地殻変動が生じた結果、複数の活断層^{注 13)}が発達し、その一部は歴史時代にも M6～7 級の地震をともし断層運動を繰り返しています。1930 年（昭和 5 年）11 月 26 日未明、既存の丹那断層に沿って地表面に 2 m に及ぶ横ずれが生じ、大地震が発生しました。北伊豆地震（M7.3）です。過去繰り返し生じた丹那断層のずれは水平方向に約 1km、上下方向に約 100m にも及びます。

北伊豆地震の震源断層^{注 14)}となった丹那断層とその南西延長、さらにその南東の姫之湯断層で当時の横ずれした地面が現存しており、丹那断層公園は国指定の天然記念物に指定されています。世界に先駆けて行われたトレンチ調査によって過去の地震履歴が明らかになるなど、世界的な活断層研究の端緒となりました。



図 3-4 丹那断層での地表の横ずれ

5. 代表的な文化サイト

世界遺産：「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」構成資産：
韮山反射炉

韮山反射炉は世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産として 2015 年（平成 27 年）に世界文化遺産に登録され、2020 年（令和 2 年）にはジオパークの文化サイトに指定されました。日本の近代化の礎を示す建物であり、実際に大砲を铸造した反射炉としては国内で唯一現存するものです。反射炉とは銑鉄を溶かし良質の鉄を作るための溶解炉です。溶かされた鉄は鋳型に流し込まれ大砲となります。江戸時代末期、韮山



図 3-5 韮山反射炉

注 13) 第四紀に活動し、将来も活動する可能性が予想される断層を「活断層」と呼びます。

注 14) 地殻変動により地震を引き起こした地下の断層。丹那断層では震源断層面の一部が現れている。

代官で江戸湾海防の実務責任者であった江川英龍の建言によって、品川台場に設置する大砲を鑄造するためにこの反射炉を建造しました。

修善寺温泉街：伊豆半島の温泉文化

伊豆半島は温泉に恵まれた土地であり、湯を求めて多くの観光客が訪れます。修善寺もその一つで、伊豆半島では数少ない温泉街を形成している地域です。修善寺温泉街では地名の由来にもなった修禅寺、807年に温泉を開湯した弘法大師の逸話を残す独鈷の湯、唯一の外湯の筥湯、源氏の悲劇を物語る日枝神社や指月殿、ロシア正教の聖ハリストス教会などの名所旧跡があります。また、夏目漱石の修善寺の大患、泉鏡花と芥川龍之介の逗留など、文人たちのゆかりも深い土地です。



図 3-6 修善寺温泉街

6. 代表的な生態サイト

筏場のわさび沢

伊豆半島はワサビ栽培の盛んな地域です。ワサビの栽培には大量の流水が必要で、この水は清廉でかつ 15℃前後の一定の温度であることが求められます。大量の湧き水が供給される背景として、伊豆半島の中央部、天城山に国内有数の多量の降雨があります。この雨は天城山の山体を作る火山岩の空隙や割れ目を伝って地下に浸透します。この山体の山裾に地下水の帯水層が露出するため、豊富な地下水が湧き出すのです。中伊豆の筏場では、天城山のカワゴ平溶岩の末端に湧く地下水を利用したワサビ田が大見川の河床に続く、静岡水わさびの代表的な景観です。

ワサビの栽培には肥料や農薬をほとんど使わず、また棚田として水の流れを緩やかにすることで、ワサビ田特有の生態系が成立し、生物の多様性を確保しています。また環境負荷の小さい、持続的な生産システムになっています。こうした点が評価され、世界農業遺産にも認定されています。

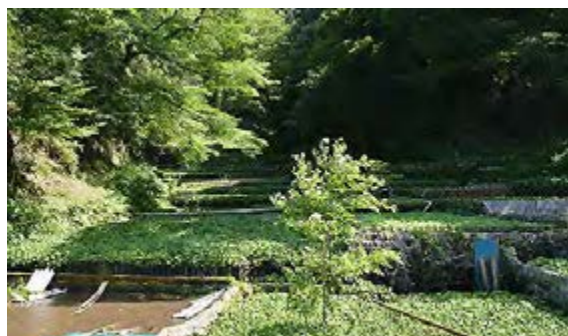


図 3-7 中伊豆、筏場のワサビ田景観

天城山の原生植物群落

天城山の万二郎岳、万三郎岳の山稜部および八丁池周辺は、天城山の原生植物群落として富士箱根伊豆国立公園の特別保護地区に指定さ

れています。この範囲では人工林に植え替えられることなく、自然林が残された大変に貴重な植物相が保たれています。原生植生の中で卓越するのは氷河期の残存種としてのブナであり、おおよそ標高 700m 以上にみられる。また多雪ではない太平洋側のブナ林植生として貴重です。ブナのほかに、アマギシャクナゲやアマギツツジも自生しています。林野庁の八丁池・皮子平生物群集保護林にも指定されています。



図 3-8 天城山原生植物群落のブナ林

7. 代表的な眺望サイト

だるま山高原レストハウスからの眺望：本州に衝突した南洋の火山島



図 3-9 だるま山レストハウスから駿河湾越しの北方の景観と山地の形成要因の違い

伊豆・小笠原弧と本州弧の衝突を展望できる絶好の場所が伊豆半島北部にあります。だるま山レストハウスは、伊豆半島の衝突・陸化後の火山活動によって形成された達磨火山の尾根上（標高 630m）に位置し、眼下に駿河湾、その向こうには富士山と箱根、さらに遠方に伊豆・小笠原弧の衝突によって本州弧側に生じた対の褶曲山脈である赤石山地と丹沢山地を眺めることができます。このうち丹沢山地をつくっている地層・岩石は、伊豆半島の衝突に先立って本州側にあいついで衝突・付加した、かつての伊豆・小笠原弧の一部です。

8. 代表的な災害サイト

海蔵寺

伊東市川奈港に近い寺院で、境内へ上がる参道の階段脇に過去の津波の際の到達高が石碑で示されています。より上位の石碑から、1703 年元禄地震、1923 年関東大震災、1854 年安政東海地震の津波到達高



図 3-10 海蔵寺の 3 基の津波到達高碑

です。伊東市は相模湾に面しているため、相模トラフ起源の地震の際に発生する津波の被害に過去たびたび襲われてきました。したがって将来にも同様の津波到達が予測されます。地震発生時にどういった行動をとるべきか地域内で共有しておくことが大切です。この点で海蔵寺の津波到達高碑は、その存在を日常の中で認識でき、ひいては地震発生の際に少なくともこれら石碑より高くへ避難する意識醸成につながっており、過去の教訓を次世代へ引き継ぐ象徴でもあります。

9. 文学者と伊豆

温泉に恵まれた伊豆は文学者らが逗留して作品を執筆してきた地であり、とりわけ近代の文学作品に伊豆が数多く登場します。天城湯ヶ島で育った井上靖（「しろばんば」等）や長期逗留をした川端康成（「伊豆の踊子」等）、熱海や沼津などの旅館で「斜陽」、「人間失格」などの代表作を執筆した太宰治、三島由紀夫（「獣の戯れ」等）など、伊豆半島は数多くの作家に愛されてきました。2018年（平成30年）度から、これらの作品と伊豆の風土とのかかわりについて語る「ジオ文豪カフェ」を開催しています。

10. 無形文化遺産

伊豆半島には登録されている無形文化財が58件あり、その内訳は国指定1件、県指定10件、市町指定46件、国と県の重複指定1件となっています。年中行事や神事、芸能が中心で、これらは法的な保護を受けた無形文化遺産になっています。このうち、伊豆一の宮「三嶋大社」（国指定重要文化財）の主祭神である三嶋大明神は、南方の火山島で噴火があるたびに神格が上がったとされる神であり、伊豆は火山にまつわる土地であることを示すものとなっています。水害との関係も深く、狩野川では毎年8月に川の神を鎮め水難者を供養する伝統行事「かわかんじょう」が行われています。また石廊崎の先端に祀られている石室神社など、海上安全の守護神として海の人々に崇拝された神社も多く残っており、今でも信仰の対象となっています。

ジオサイト以外の関連重要サイトとジオパークとの関係

カテゴリー	サイト名	内 容
水と森林	函南の原生林	江戸時代から守られてきたブナをはじめとした原生林
	大瀬崎	神池の湧水、北限のビャクシン群落
	天城の原生林	国立公園特別保護地区、ブナやヒメシャラなどの原生林が残る
自然災害	地震動の擦痕	北伊豆地震の地震動が魚雷表面に残る。国指定天然記念物
	狩野川放水路	狩野川台風、水害と地域の歴史

自然災害	各地の津波慰霊碑・津波浸水高石碑	明応・慶長地震、元禄関東地震、安政東海地震、大正関東地震の津波の被害の慰霊と教訓
歴史	黒曜石	柏峠産黒曜石による石器は中部地方の各地に分布
	韮山反射炉	江戸末期に江川英龍により大砲製造のための鑄造用反射炉。炉体には一部「伊豆石」が用いられている。煉瓦は河津産の粘土が焼かれた。明治日本の産業革命遺産として世界文化遺産の構成資産。
	修善寺温泉/修禅寺	弘法大師伝説、頼朝や北条氏の物語、文人ゆかりの温泉
	旧天城トンネル	下田街道の山越え難所、小説「伊豆の踊り子」の舞台
	下田港	廻船航路の港湾、ペリー艦隊の来航、安政津波とディアナ号、「伊豆石」や「なまこ壁」の建造物
	松崎	入江長八の鍔絵芸術、「なまこ壁」の建築物群
特産物・産業	伊豆石	江戸城、お台場砲台の築城石、韮山反射炉や下田の街並みの建材
	金鉱山	土肥・縄地金山など、江戸時代には佐渡金山に次ぐ産出鉱山
	珪石鉱山	宇久須珪石（かつて工業ガラス原料生産のシェア 1 位）
	水わさび	世界農業遺産、国内生産量 1 位（H30 年度）、自然環境と湧水の関係
	丹那の酪農	丹那トンネル開削による酪農への転換
	伊豆のテングサ	暖流の浅海の赤藻、テングサを採取し、手作りでところてんを製造
	深海生物	タカアシガニ、キンメダイなどの深海生物が生息する駿河ー相模トラフが近海にある特徴を活かした漁業
	田子の潮かつお	カツオを塩漬けして風乾させる製法で、西伊豆町田子地区の伝統的保存食。正月魚にも通じる縁起物としても伝統が継承されている。
信仰	白濱神社/三嶋大社	火山噴火と古代の祈り
温泉	伊豆半島の温泉 伊東温泉街の景観	十数万年前まで続いた陸上大型火山活動の余熱が伊豆半島の地下に遍在しており、この熱で暖められた地下水が温泉として各地に湧く。伊東市街地は登録文化財指定を受ける温泉宿が連なる景観が残る。
文学	伊豆近代文学博物館（昭和の森会館） ふるさと井上靖文学館（長泉町）など	温泉地に逗留した文学者たちによって伊豆の景観が作品に描画され、登場人物の心理描写の比喩として登場している。湯ヶ島温泉は井上靖著「しろばんば」の舞台であり、また川端康成が「伊豆の踊り子」を執筆した地。「伊豆近代文学博物館」には伊豆にゆかりの作家 120 人の直筆原稿や愛用品が収蔵され、長泉町にはふるさと井上靖文学館があり伊豆文学の重要な情報発信拠点となっている。
無形遺産	かわかんじょう 妻良の盆踊り	狩野川の水霊を鎮め水難者の供養を願う行事で、一時衰退したもの の地域で継承されている。 女衆が輪になって、太鼓や笛、三味線の囃子に合わせ緩やかなテンポで踊る。京起源の室町時代の文化の流れを受け継いでいる。

第4章 伊豆半島ジオパークの目指すビジョン

1. 輝く^{みらい}次世代へ、動き続ける伊豆半島

伊豆半島ジオパークは「世界ジオパークとしての価値の提供」として

- ① 世界的にも特異な伊豆半島成り立ちを反映する地形と地質の価値
- ② 動く大地に生きる人々の自然観と大地の遺産の活用、先進的な防災の取り組み
- ③ 地域住民が主体となった持続可能な取り組み

を通じ、輝く次世代へ、活動し続け持続可能な伊豆半島の実現を目指します。

2. 伊豆半島ジオパークが目指す姿

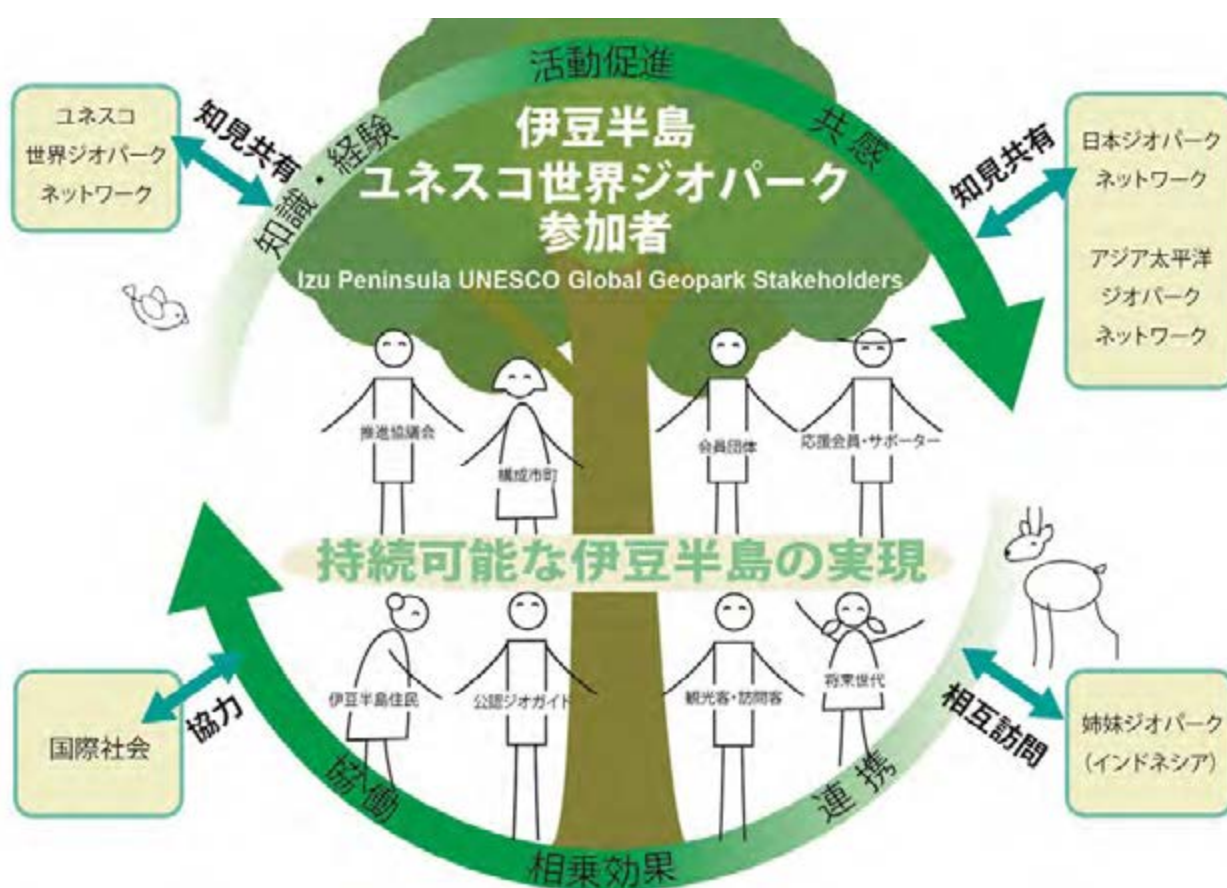


図4-1 伊豆半島ジオパークが目指す姿（概念図）

第5章 取り組み方針と行動計画

1. 研究と保全



1-1 基本的な考え方

伊豆半島ジオパーク推進協議会事務局には3名の専任研究員がおり、伊豆半島にかかわる各分野の研究に努めています。また世界的価値を持つ大地の遺産があってユネスコ世界ジオパークに認証されたことから、その価値に相応しい研究が行われていることになっています。そこで「学術研究助成」制度を整え、世界先端レベルの研究を奨励し、英文による査読論文の刊行を励行しています。こうして得られた研究成果は毎年地域に還元され、サイトの解説やガイド活動に活用されています。伊豆半島ジオパークの領域内には複数の大学キャンパスが設置されており、これらの大学との協働の一端として専任研究員を派遣して講義を兼担して伊豆半島をフィールドとする共同研究の端緒としています。この中で、2019年（平成31年）4月、静岡大学の研究施設とジオパークの研究活動展示施設「あまじお」を整備し、従来の地質学のみならず生物学での協働も始まっています。これら様々な分野での研究活動を推進して新たな知見を蓄積させるとともに、これらの成果を地域やジオパーク活動に還元していきます。

保全分野においては、伊豆半島ジオパークの多くのサイトは自然公園法や条例、文化財保護法、森林整備計画等が整えられていますが、法的保全がなされていないサイトも一部にあります。このため、伊豆半島ジオパークは、今後サイトの保全状況が悪化した際に、保全が図れるようエコツーリズム推進法に基づき、エコツーリズム推進基本構想の策定作業を進めており、環境省より本構想の承認後は、構想の基本方針に基づき、構成市町と連携しながら各サイトの保全と活用の適正化を図ります。

1-2 SDGs 指標の実現に向けて

ジオパークの基盤となる「伊豆半島ならではの価値」を物語る遺産を保全・活用しながら将来にわたって様々な教育の場での普及・啓発に努め、次世代につながる持続可能な活動ができるよう市町やジオガイド協会や関係機関との連携を強化して、研究保全活動の定着化により適正なサイト管理を行い、伊豆半島の豊かな陸の豊かさや海の豊かさを継承していきます。

1-3 保全活動方針

伊豆半島の魅力は、第2章で述べたように世界に類を見ない特異な地球活動の歴史と現在も続く火山活動や地殻変動によってなり立っています。サイトの一部は国立公園に

指定されており、自然公園法、自然環境保全法、文化財保護法、森林法、海岸法、河川法、土地利用関係法令、その他の条例によってサイトの多くが保護・保全されています。一方で法律・条例の保護対象となっていないサイトもあり、伊豆半島ジオパークでは価値ある自然の遺産を持続的に守り活用していくために、サイトの保全に関する方針及び計画を策定し、次世代に継承していきます。大地の遺産とは、生態や景観、文化が大地を土台にして成り立っているという考えに基づきます。

伊豆半島ジオパークでは、大地の遺産と社会のつながりを常に意識する評価方法と、それに基づいた大地の遺産の保全の仕組みを作りに取り組んでいます。その第一段階として、平成 25 年度（2013 年度）には環境省の協力を得て自然文化資源活用調査を行い、ジオサイト及び関連する自然文化資源（無形文化、信仰等も含む）の情報カルテを作成しました。2020 年（令和 2 年）からは伊豆地域をケーススタディとした持続可能なツーリズムの評価体系の策定に取り組みました。また、行政や事業者、地域住民が計画的に各サイトを保護、保全するためには指針が必要であることから、現在伊豆半島エコツーリズム推進基本構想を策定し、サイトの保全及び活用のガイドラインを策定しています。

今後は、これまでの保全成果や構想指針等をもとに、学術研究による知識を地域の方々や内外の訪問者にも適切に周知し、課題解決に向けた意見が常にフィードバックされ改善されるよう、地域住民や研究者、行政等が各段階で主体となって活動できる体制の構築と実践を目指します。また、環境保全や景観保全についても伊豆半島ジオパークとして構成市町や会員や団体等、地域住民を含めた関係機関との連携を密に取り組んでいきます。

1-4 サイトの保全・維持管理

伊豆半島ジオパークにおけるジオサイトの維持管理、保全の現状や事例、データについて、(1)法令等による規制、(2)自然再生、結果的保全、(3)ジオパーク、その他の活動の3つの種別に分類されています。

1-4-1 法令等による規制－自然公園法、文化財保護法、条例等による保全

伊豆半島ジオパークは、自然公園法にもとづく富士箱根伊豆国立公園の伊豆半島地域（22km²）を含んでいます。同地域は主に固有種やブナ林などの貴重な生態が残る天城山などの山稜部と海岸線からなり、ジオサイト 159 箇所のうち、国立公園として保護されているサイトは 80 箇所あります。

このうち特別地域内は 72 箇所、特別保護地区内のサイトは 2 箇所（八丁池及び天城山の原生植物群落）です（詳細はジオサイトリストを参照）。国立公園内では開発、工事、伐採等が制限されるなど強力な規制が働いています。

また、文化財保護法・条例に基づく文化財は、ジオパーク内に国・県・市町指定を合計すると、750 箇所以上存在します。うち 40 箇所はサイトであり、それ以外にも貴重な植物の群落等も天然記念物に指定されているケースが多くあります。その他、景観（下田・熱海・伊豆の国など）、屋外広告物（三島など）、環境（長泉など）の各条例や海岸保全基本計画、地域森林計画など各種法律に基づき県や市町が定める計画も有効な規制作用となっています。

1-4-2 地域社会による自然再生及び結果的保全

伊豆半島の地域では、ジオパークという言葉が使われる以前より、自然再生が自発的に行われてきた活動があります。主に自然再生運動と結果的保全の例を紹介します。

a) 自然再生への取り組み

一度悪化した景観や生態系を取り戻そうと、地道な努力と適切な方法により自然再生に取り組んでいる事例があります。地元社会の積極的な参加と基本方針によって守り支えられているこれらの活動は、「景観」や「生態系」という観点に立っており、結果的にジオパークの多様な活動による保全に寄与しています。

自然再生の取り組み事例

柿田川 (清水町)	富士山の湧水が形成する 1.2km の貴重な清流であり、固有の生態系を育んでいます。経済成長期には工場の進出などによって川の環境が著しく劣化したが、その後ナショナルトラスト運動の先駆けともなる環境回復活動によって清流が再生しました。現在も柿田川の自然再生を進めるため、国土交通省沼津河川国道事務所は「柿田川自然再生検討会」を設置し、2011 年度に「柿田川自然再生計画」を策定。有識者、保護団体等との協力を通じた自然再生が行われています。
三島の湧水群 (三島市)	柿田川と同様、三島市の湧水群においても熱心な地元住民や保護団体を中心となり精力的に自然再生活動が展開されています。NPO 法人グランドワーク三島の活動により源兵衛川は 2018 年に世界水遺産に登録されました。
石部の棚田 (松崎町)	松崎町石部の山間に石積みの棚田が約 370 枚、4.2ha にわたって広がる。農業従事者が住民やボランティアの協力を得て、全体の 90% に達した放棄棚田の回復を行い、美しい景観を取り戻しました。棚田オーナー、トラスト会員制度により首都圏からの来訪者、企業や県内大学生との協働の輪も広がっており、集落活性化の起点として活用されています。



図 5-1 自然再生の取り組み事例（左：三島湧水のミシマバイカモ、右：石部の棚田）

b) 伝統的に守られている景観保全のとりくみ

古来より伊豆の人々は自然資源の一部を共同で利用し、その資源と関係する景観や生態を維持してきました。その目的は山焼きなどによる資源利用や、習俗や信仰もあります。このように伝統的に守られてきた景観は結果的保全として評価されます。長い年月を経て残されてきた景観は、伊豆半島ジオパークの各サイトの保全に繋がっています。

伝統的に守られている景観の事例

サイト名	活 動 内 容
大室山 (伊東市)	4000 年前の噴火で誕生した日本最大級のスコリア丘では、約 700 年前から茅取りのため山焼きが行われてきた。山焼きによって森林の萌芽が抑止され、美しい姿が保たれている。
三筋山・細野高原 (東伊豆町)	三筋山はかつての大型陸上火山・天城山の一部を形成し、その南東斜面の地すべりによって細野高原が形成された。秋にはススキが一面に広がる。大室山同様、古くからの山焼きにより森林の育成が抑えられ、火山斜面の地形が維持されている。
巨樹・巨木	伊豆半島には巨樹巨木が数多く残っている。古くから鎮守の森として守られてきた事例が多く、暖地性樹木の北限になっている。古来の信仰や文化によって残されたこれらの植物は、伊豆半島の自然環境を示している。
シラヌタの池 (東伊豆町)	川久保川の上流に位置するシラヌタの池は約 80 万～20 万年前の噴火でつくられた天城火山の地すべりでできた窪地が湛水した池で、原生林に囲まれ、天然記念物モリアオガエルの生息地である。アクセスが安易ではないため人為影響が少なく、結果的に自然環境の保全を達成している。

c) ジオパーク活動による保全

伊豆半島ジオパーク推進協議会が発足し、伊豆半島がジオパークとして国内外から認知されたことが契機となり、慣れ親しんだ景色に新たな価値を見出し、保全活動に取り組んでいます。例として露頭の保全や、地層の剥ぎ取り標本作成などが挙げられます。

また、土木工事で出現する地質のジオパークとしての価値等についても、静岡県庁市町の土木職員への研修も行っており、保護保全の普及に繋がっています。

ジオパーク活動として行われている保全事例

サイト名	活 動 内 容
一色の枕状溶岩 保全活動 (西伊豆町)	伊豆半島最古の地層（仁科層群）、枕状溶岩の露頭。 ジオパーク活動によってその価値が認識され、町内会によって実質的な保全が行われた。ジオパークの世界認定後は松崎高校サイエンス部や地域のジオガイドによって継承されている。
県土木職員研修	ジオサイトをはじめとする地質遺産は工事により失われることもある。協議会では、無理解による遺産の喪失を防ぐため工事を所管する静岡県や市町の土木職員を対象としたジオパークや景観に関する研修を行い、遺産の保全や景観に対する理解を促した。既に 10 年行っているこの研修により、工事での出現露頭の剥ぎ取りや 3 次元デジタルデータの計測による保全が実施されてきた。

上記以外にも、ジオパークエリア内で行われている景観の保護・保全、整備や清掃活動がステークホルダーによって日常的に実施されており、ジオパークの自然文化遺産の保護に直接関連します。

その他の保全にかかわる活動事例

活動種別	内容
海の清掃活動 (伊東市、下田市)	ダイビングショップ有志で構成する伊豆半島ジオマリンクラブは年間数回、伊東市の八幡野、富戸海岸の海中のごみ収集を行っている。また下田海岸では地元のジオガイドらが海岸清掃を開催。清掃時には小学生の参加を募り、ビーチコーミングを兼ねて楽しみながらごみ拾いをするといった工夫をしている。

1-5 研究活動の取り組み

伊豆半島における学術研究の底上げを目指し、2015年度（平成27年度）から若手研究者の研究奨励を始めました。ユネスコ世界ジオパーク認定を受けた2018年度（平成30年度）からは方針を変更し、世界レベルの研究を支援して、英文による査読論文刊行を励行する研究助成へ変更しました。また研究助成制度を機関研究者に広く周知することで幅広い分野の研究が行われるようになりました。研究助成採択者には、研究成果を一般市民に向け専門用語を排除しアウトリーチする視点で成果講演を行っています。世界的な先端研究の普及、地域浸透にも貢献してきました。これからも各サイトの内容の高度化を図るために、研究サイトを中心に研究調査を進めるほか、研究拠点として整備した「あまじお」を活用した研究活動に取り組みます。

表5-1 過去4年間の「伊豆半島ジオパーク学術研究助成」採択研究分野別件数

	地球科学分野	生命科学分野	人文社会科学分野
2017年度	2	1	
2018年度	2	2	
2019年度	2	1	
2020年度	1	1	1

また、伊豆半島ジオパーク学術研究助成事業を継続するとともに、これまでに蓄積された研究資料について、積極的な情報発信を図り学術的研究の利活用を図ります。また引き続き、管内の高等学校での研究成果の発表の場を設けるなどの支援に取り組みます。

1-6 目指す姿

ジオパーク推進協議会自身が研究を実践して、また世界を先導する研究を奨励して、得られる知見が保全を行う根拠になります。一方で経験知にもとづく伝統を普及して、様々なステークホルダーの参画による実質的な保全にも努めていきます。さらにエコツーリズム推進基本構想によって保全が図れる方策を確立していきます。

行動計画 2021～2025 年度に取り組む事業							
取り組み	実施主体	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	2025 (R7)	2025 数値目標
サイトの保全・管理	構成各市町 協力：ジオパーク推進協議会	保全・ 管理の 実施	保全・ 管理の 実施	保全・ 管理の 実施	サイトの 見直し	サイトの 見直し	サイトの見直しによる整理 (100 程度に)
県市町土木職員を対象にした研修	静岡県建設技術監理センター	継続 実施	継続 実施	継続 実施	継続 実施	継続 実施	毎年 開催
住民や学校、利害関係者による実質的な保全	ジオパーク推進協議会	継続 実施	継続 実施	新実施地 立案	新実施地 実装	継続	新規サイトでの運用 2 箇所以上
あまじおでの研究調査活動と利活用	ジオパーク推進協議会 静岡大学・地域住民	研究 活動	論文 執筆	研究 活動	論文 執筆	研究 活動	各研究員 論文刊行
地質・自然・文化等の研究データベース更新・活用	ジオパーク推進協議会	文化 DB 作成	自然 DB 作成	DB の 成果 実装	DB の 成果 実装	DB 更新 着手	DB による新規ツアー造成（3 件）
伊豆半島ジオパーク学術研究助成事業	ジオパーク推進協議会	実施	継続	継続	継続	継続	開催成果の活用事例 3 件以上

2. 教育活動（学校・社会）



2-1 基本的な考え方

ジオパークの教育活動は、ただ単に岩石や地層の知識を学ぶのではなく、大地の成り立ちと人々の歴史や産業、文化とのつながりを学び、地域の良さや魅力に気づき郷土愛を育む活動であり、そこから地域の持続可能な開発のために自然環境の保全や地域の課題解決に向けて行動できる人材を育てることです。このような教育は「持続可能な社会の創り手を育てる教育（ESD）」として新学習指導要領に位置づけられています。さらに義務教育期間だけでなく高等学校や大学における多様な社会教育や研究活動も重要な意味を持ちます。また地域においても大地と地域の産業や経済とのつながりを学び郷土への誇りを高め、定住や地域の持続可能な開発のために活動する意欲高揚につながります。

これに加え伊豆半島では防災という観点から地震、火山や風水害などの自然災害の教訓を次世代に継承する取り組みが必要です。教育活動においては、これまでも「小中学生のためのジオ学習」テキストの作成や「教育通信」などジオ学習の取り組みを行っていますが活動地域に偏りがあることから、15 市町のすべての地域においてジオパーク学習が活性化するように、学校や教育委員会、社会教育施設とも積極的に連携していきます。

2-2 教育部会

教育部会は教育活動に携わるジオガイドや学校教員、教育分野の研究者、教育支援機関（ESD 活動支援センター、ユネスコ・アジア文化センター）メンバーで構成されています。2017 年（平成 29 年）より教育部会が中心となり方針設定や検証、教育用の素材として児童生徒向けのマンガ「伊豆半島のひみつ」の配布、教育ジオガイド養成の検討などを行ってきました。2019 年（平成 31 年）には「小中学生のためのジオ学習」のテキストも作成しました。このテキストは各小中学校、各市町教育委員会へ配布し環境教育のほか郷土学習、防災教育などジオパークを活用した学習に用います。またアクティブラーニングができるように配慮し、特に小学校のジオ学習には好評なテキストとして活用されています。今後も教育プログラム用教材の充実によって、小中学校生が楽しくジオパークを学べる環境づくりに取り組むとともに高等学校や大学とも連携し、より深い学びができるように協働して取り組みます。

2-3 小学校

小学校におけるジオ学習は、5、6 年生の理科の単元で扱われます。また、総合的な学習の時間でも活用されることが多くあります。ジオというと石や地層の学習と取られがちですが、大地に根ざした産業や文化、歴史も大切なジオ学習であり、自分たちが住む伊

豆がどんな場所かを学んでいます。子どもたちの感想の中に、「この学習で、私は普段見慣れている景色や風景の見方が変わりました。自慢できる町に住んでいるんですね。」とあるように、実際にその場に行つての大地の学習は子どもたちの心に残り郷土愛を育んでいます。

小学校におけるジオ学習は、子どもたちが自分の住む伊豆半島を知りさらには故郷に誇りをもつきっかけとなるものです。まだ地域による取り組みの差がありますが、今後学校での教育内容と連携するプログラムを作成するなど伊豆半島全域でジオ学習が展開されるよう取り組みます。

2-4 中学校

中学校におけるジオ学習は、1年理科の「身近な地形や地層」、「地層の重なりと過去の様子」、「火山と地震」、「自然の恵みと火山災害・地震災害」、2年理科の「自然の恵みと気象災害」で直接的に学んでいます。そのほか社会科の「地理的分野」や「歴史的分野」で日本や世界各地の自然環境や資源・エネルギーと産業の関係を地域の特徴と結びつけて学んでいます。またこれらで学んだ知識を応用する場面として、総合的な学習の時間を使った体験や課題解決に向かう学びが行われています。

しかし、一部の学校で行われている地域学習や防災教育を除いて中学校の現場ではジオを通じた学びから郷土愛や地域課題の解決に結びつくようなアクティブラーニングは行われていません。今後は「小中学生のためのジオ学習」のテキストを活用して、熱意を持ってこのような学習に取り組む学校を拠点として持続可能な社会の創り手を育てる教育（ESD）に取り組む学校を増やします。

2-5 高等学校

高等学校では、学校ごとに様々な課程の中でジオパーク学習が行われています。学習の専門性を活かした調査や商品開発の具体例では、韮山高校の地学分野における課題研究、熱海高校の避難経路についての住民ワークショップ、沼津商業高校の地元企業とジオパークに関係した商品開発があり、伊豆半島ジオパークの普及に繋がりました。このほかにも部活動を通じた地域の魅力発信として、韮山高校写真報道部と伊豆総合高校の写真部は伊豆箱根鉄道が運行する「ジオトレイン」にジオサイトの写真と解説文を組み合わせた掲示物を作成しました。

このように、高等学校の段階ではジオパークについて学ぶというだけでなく、学んだことを発信し、地域に還元する活動へと発展させられます。そこで伊豆半島ジオパークでは、高等学校と地域を結び付け、協働活動を行う支援をしていきます。授業で行う専門的

な知識の供与、探究活動や教科横断型の学習に向けた支援、ESD に則した学習活動についても柔軟に実施していきます。

2-6 大学

これまで静岡県内の大学が実施する伊豆半島ジオパークを題材とした授業や研究への協力を行ってきたほか、「ふじのくに地域・大学コンソーシアム」に参画し、ジオサイト等を活用したフィールドワークや地域の担い手作りの支援を実施してきました。今後も管内の各大学との相互連携を進め、戦略的パートナーシップの構築に努めます。

2-7 一般市民

ジオカフェやジオ検定、ワークショップをはじめとした企画やジオツアーの開催によって「伊豆半島ジオパーク」の認知度は高まりました。ジオパークは、市民ひとりひとりの参加によって成立するものです。したがってこの人の輪をより大きく、継続的に実施することが大切です。したがって、今後はジオパーク活動のさらなる普及と住民の参加機会を増やしていきます。

2-8 目指す姿（ビジョンの可視化・共有）

幼少期から継続的、体系的に伊豆半島を学び、その恵みを享受しながら生活し生まれ育つ伊豆という土地への郷土愛を育み、さらに課題解決の能力を涵養していきます。同時に伊豆半島の成り立ちから、伊豆半島が抱える自然災害のリスクを理解し、来るべき災害での減災を達成します。さらに生涯学習を通して、すべての世代へのESDを達成します。

行動計画 2021～2025 年度に取り組む事業							
取り組み	実施主体	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	2025 (R7)	2025 数値目標
教職員向け ジオパーク学習研修	ジオパーク推進協議会 構成市町教育委員会	年1回	年1回	年1回	年1回	年1回	5年間で 5回以上開催
生涯学習講座の実施	ジオパーク推進協議会 構成市町教育委員会	年1回 以上	年2回 以上	年2回 以上	年3回 以上	年3回 以上	5年間で11 回以上実施。
高校や大学との連携 事業の実施	ジオパーク推進協議会 高等学校/大学	年1校 以上	年1校 以上	年1校 以上	年2校	年2校	5年間で7校 以上と実施
ジオパーク学習視察 受入れ	ジオパーク推進協議会 ジオガイド協会 ジオガイド		2回 以上	3回 以上	4回 以上	4回以 上	5年間で 13回以上
教育WEBサイトでのコ ンテンツ作成	ジオパーク推進協議会	新規1 コンテ ンツ作 成		新規 コンテ ンツ作 成		新規 コンテ ンツ作 成	WEB閲覧件数 前年比10% 増
域外出前授業の実施	ジオパーク推進協議会	年1回	年1回	年1回	年1回	年1回	5年間で 5回以上開催
域内小中学校向け出 前授業の実施	構成市町教育委員会 ジオパーク推進協議会 ジオガイド	新規 1市町	新規 1市町	新規 1市町	新規 1市町	新規 1市町	全15市町で の実施

3. ツーリズム・地域振興



3-1 基本的な考え方

伊豆半島ジオパークでは「ジオツーリズム」を推進しており、大地の遺産を含む自然環境や地域の歴史文化をジオパークのサイトに認定し、大地の遺産の保全、認定ジオガイドの育成、拠点施設の設置、情報発信、ジオカフェの開催を通じて地域の歴史・文化資源の掘り起こしを行いました。既に実践している「ジオツーリズム」、さらに今後推進する「エコツーリズム」を両輪として持続可能な観光地域づくりを目指し、地域振興を推進します。

認定ジオガイドや準ジオガイドの皆さんによる各種ジオツアーは観光施設やビジターセンターで取り組まれています。現在は新型コロナウイルス感染症対策のため、万全を期した対応を心がけています。今後は大室山などにてジオサイトの保全と活用を両立させる魅力あるジオツアーの取組みをはじめ、今後環境省のもとで推進する「エコツーリズム」を両輪として持続可能な観光地域づくりを目指し、地域振興を推進します。

3-2 SDGsの実現に向けて

「ジオツーリズム」や「エコツーリズム」の推進に際しては、今まで以上に地域の自然観光資源や文化資源を保全し、次世代への継承を図ります。持続可能な地域経済を確立するため、美しい伊豆創造センターとも連携を密に、観光業におけるサービス生産性の向上に努め、関係者間の一層の連携強化による質の高い観光地形成に取り組めます。

伊豆半島ジオパークの活動は、「誰もが住み続けたいと思える持続可能な開発を通じた地域づくり」を目指すものです。ジオパークエリア内外でパートナーシップやネットワークを強化し、認定ジオガイドの育成およびスキルアップ支援、ジオカフェ等地域密着型イベントの開催、地域資源の見直し、誰もが楽しめる新しいジオツアー開発によって SDGs の実現に取り組んでいきます。

3-3 ジオガイドの養成

伊豆半島ジオパークは、2011年（平成23年）3月の伊豆半島ジオパーク推進協議会の発足後直ちにジオガイド養成講座を開催、現在は隔年で開催し、194名のジオガイドが認定されています。様々な活動を通じ伊豆半島ジオパークの解説や教育、普及啓蒙に取り組んでいます。ジオガイドがジオツーリズムのみならず教育現場やジオリアやビジターセンターの運営や、地域におけるジオパーク活動の推進役となっており、これらの活動は国内で高い評価を受けています。

今後はこれまでの活動を踏まえつつ、研修や他地域のジオパークガイドとの交流を通

じ、ジオガイドの質の向上に取り組めます。特にこれからの養成講座や更新講習は SDGs の実践やインバウンドを意識しつつ、ガイドとしての基本資質である「解説」能力の向上をはじめとした資質改善に取り組めます。

3-4 ビジターセンターを拠点としたガイドツアー造成

伊豆半島ジオパークは、構成 15 市町により整備運営されるビジターセンターにおいて来訪者へのジオパークの楽しさやその地域ならではのジオパークの見どころを紹介し、情報発信を行っており、半島全体における可視化に貢献しています。

特にジオガイドが常駐しているビジターセンターでは独自の企画展や予約なしで参加できるジオツアーを催行し、予備知識のない人にもジオパークの魅力を伝え、評価されています。さらにビジターセンターを相互連携して相乗効果を生み出すネットワーク化に取り組むことが喫緊の課題でもあります。

3-5 エコツーリズム推進全体構想の認定によるエコツーリズム推進

身近な環境の保護意識の高まりや自然と直接触れ合う体験ニーズの高まりをうけ、2008 年（平成 20 年）4 月にエコツーリズム推進法が制定されました。この法の目的は観光旅行者が自然観光資源について知識を有する者から案内・助言を受け、自然観光資源の保護に配慮しつつ自然観光資源とふれあい知識及び理解を深めることです。伊豆半島ジオパークが目指すジオツーリズムと合致することから、伊豆半島ジオパークでのエコツーリズム推進全体構想の策定に取り組んでいます。構想の基本方針はみんなに嬉しいエコツーリズム、自然の保全と活用のバランスがとれたエコツーリズム、人と自然の関りを理解し深めることができるエコツーリズムを目指すもので、現在関係省庁との事前協議を行っています。今後構想認定申請については、本事業の先進地に学び、構成市町やジオガイド、アクティビティ事業者、交通事業者、観光関係者とも連携して役割分担を明確にしつつ、伊豆半島ジオパークの新たな観光振興に寄与していきます。

3-6 目指す姿

伊豆半島ジオパークでは 2019 年・2020 年度（平成 31 年・令和 2 年度）に採択された環境省地域循環共生圏事業を活用し、伊豆半島におけるサステナブルツーリズムの推進に着手しました。その中で「サステナブルツーリズムポリシー／ビジョン（案）」を定め、私たちが目指す姿を具体化します。

今後は、特に以下の 4 項目を踏まえ、伊豆半島ジオパークとして取り組めます。

① 火山できた伊豆半島の大地とそこで育まれてきた動植物・文化を尊重します

伊豆半島に暮らす人、訪れる人、すべての人が自然環境や地域文化に敬意を払うことを

意味します。これは伊豆半島が持つ自然環境と地域文化の価値を損なわないためです。

② 伊豆半島の自然を保全し文化を継承します

開発による環境破壊および文化の喪失を防ぎます。これによって環境保全に対する意識啓発を行うと同時に資源管理を徹底します。地域資源があつてこそその観光だからです。

③ 人・モノ・カネ・情報の域内循環を向上させます

伊豆半島北部の都市と中南部の観光地間の交流を促進します。新たな試みとして、半島内住民向けジオツアーの開催などマイクロツーリズムを興し、自立的発展を促します。

④ 責任ある旅行者が伊豆半島の自然と文化を満喫できる時間と空間を提供します

観光公害は現代観光が解決すべき課題です。そこで伊豆半島ジオパークでは自然環境、地域文化、地域経済に配慮した行動を取ることができる責任ある旅行者を励行し、彼らをターゲットとした旅行商品の開発に着手します。

行動計画 2021～2025 年度に取り組む事業							
取り組み	実施主体	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	2025 (R7)	2025 数値目標
ジオツアーの実施	伊豆半島ジオガイド協会 ジオガイド 民間事業者	ツアー 参加者 12,000 人 規模維持	ツアー 参加者 13,000 人	ツアー 参加者 14,000 人	ツアー 参加 15,000 人	ツアー 参加者 16,000 人	ツアー 参加者 16,000 人
サイトの保全と活用・ 解説板整備 (可視化・多言語化)	構成市町・民間事業者 地域活動団体等 (ジオパーク推進協議会も協力)	新設及 び改修 3箇所	新設 及び 改修 3箇所	新設 及び 改修 3箇所	新設 及び 改修 3箇所	新設 及び 改修 3箇所	新設・改修 5年間で 5箇所以上
環境省 エコツーリズム推進 基本構想に基づく事業	ジオパーク推進協議会	本申請 /認定	事業 実施	事業 実施	事業 実施	事業 実施	ツーリズム 参加者数 前年比 +10%
ジオガイドの養成講座	ジオパーク推進協議会 (ジオガイド協会委託)	実施	更新 講習	実施	更新 講習	実施	認定 ジオガイド 総数 300 名
長期滞在型ジオツアー の商品企画	ジオパーク推進協議会 伊豆半島ジオガイド協会 ジオガイド 美しい伊豆創造センター		商品 造成 販促	商品 造成 販促	商品 造成 販促	商品 造成 販促	商品造成数 5年間で 10 本
ジオストーリー活用 商品の高付加価値化	ジオパーク推進協議会 伊豆半島ジオガイド協会 ジオガイド 美しい伊豆創造センター			商品 造成 販促	商品 造成 販促	商品 造成 販促	商品造成数 5年間で 10 本
公式ガイドブック等 の作製・改定	出版社 監修：ジオパーク推進協議会				改訂版 発行		2000 部 販売
ジオ関連新商品の 開発・情報発信	ジオパーク推進協議会 協議会会員 民間事業者			開発 情報 発信	開発 情報 発信	開発 情報 発信	商品開発・ 発信数 5年で 10 本

4. 災害リスクの軽減



4-1 基本的な考え方

静岡県、伊東市、伊豆市の地域防災計画には「伊豆半島ジオパーク推進協議会と連携し、観光客等に対して火山に関する防災思想と防災対応を広く普及・啓発する」と明記されています。伊豆半島ジオパークのサイトには、災害遺構や記録を災害サイトとして設定しています。具体的な防災対応としては、新たに伊豆東部火山群火山噴火緊急減災対策砂防計画推進連絡会（平成30年設立）にメンバーとして参画、自治体防災職員を対象としたジオパークの災害サイトの視察、2019年（令和元年）7月には1989年の伊東沖海底噴火から30年の節目であることを踏まえ災害記憶の継承を目的としたシンポジウムを行った。近年全国各地で多発する自然災害を見るにつけ、災害の忘却、風化を防ぎ、啓発することはますます重要になると思われます。

伊豆半島ジオパークでは独自のサイト区分として14の災害サイトを指定し、災害遺構や津波到達碑、防災施設など、現地で本物にふれながら防災教育に取り組んできました。引き続き各種災害リスクに関する知識や、今後起こりうる災害に思い致す能力を養うために、関係機関と連携して災害サイトを活用した防災普及に努めるとともに、防災文化の発信や人材育成を進めていきます。

4-2 SDGs 指標の実現に向けて

伊豆半島はプレート境界付近に位置し、活発な地震・火山活動が繰り返されてきました。伊豆半島は過去にも、今後も、大きな地震被害を起こしうる想定地震として、東海地震、南海地震があり、加えて伊豆東部火山群による群発地震も想定されます。また海底での地震による津波も想定され、伊豆半島の沿岸部では防災まちづくり活動が行われています。また伊豆半島は豊かな自然資源を有する反面、急峻な地形と降水量が多い地域であることから水害や土砂災害も頻繁に発生しています。

ジオパークの活動を通じて、人々は大地のなり立ちを学ぶことができます。その過程で過去の災害に関する知識や、将来起こり得る災害に備えることもできます。小学生から社会人までがジオパーク活動を契機に正しい防災知識を習得することが災害リスクの軽減につながります。国や県、構成市町の防災部局とも連携を密に、地球環境を意識した取り組みを行います。

4-3 目指す姿

自然災害のリスクから私たちの生命や暮らしを守り、生活を続けていく上で重要なのが“自助”、“共助”、“公助”^{注15)}の3つの“助”とされ、この3つがバランスよく機能す

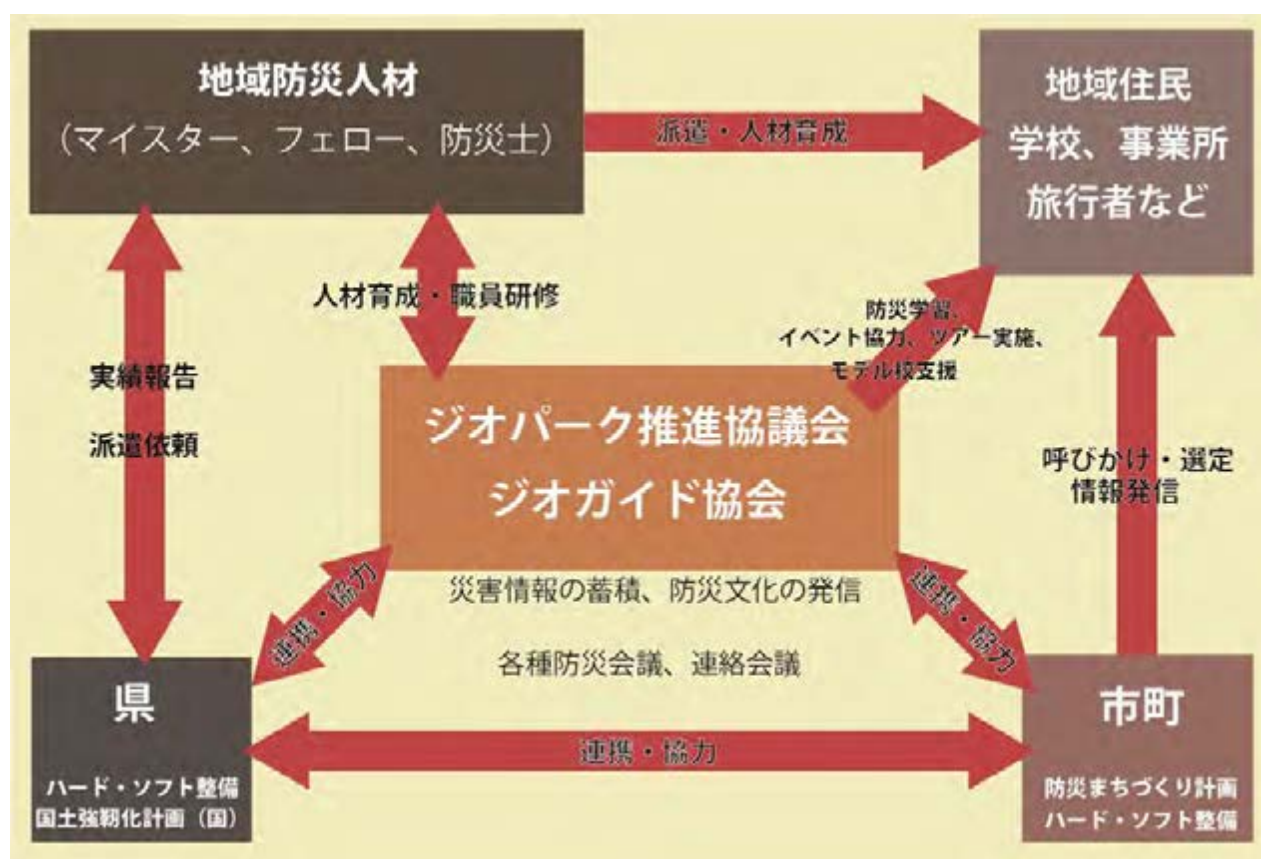


図 5-2 災害軽減に対する取組の相関

ることで災害リスクの軽減につながります。そこで伊豆半島ジオパークでは防災教育の普及や人材育成、災害記録・証言等の目録化とジオツーリズムへの活用に取り組み、誰もが安心・安全に暮らせる伊豆半島の実現を目指していきます。

注 15) 自助とは住民ひとりひとりが豊かな生活を送るために努力すること。共助とは近隣の住民等が豊かな地域づくりに協力・協働すること、また公助とは法律や制度に基づき、行政などがサービスを提供することです。

行動計画 2021～2025 年度に取り組む事業							
取り組み	実施主体	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	2025 (R7)	2025 数値目標
災害サイトを活用した防災学習の推進	ジオパーク推進協議会 伊豆半島ジオガイド協会 ジオガイド 構成市町各学校	継続 実施	継続 実施	継続 実施	継続 実施	継続 実施	毎年 1 回以上 5 年間で 5 回 以上実施
防災普及啓発イベント、展示会の実施	ジオパーク推進協議会 伊豆半島ジオガイド協会 ジオガイド 連携企業 構成市町 ビジターセンター	継続 実施	継続 実施	継続 実施	継続 実施	継続 実施	毎年 1 回以上 5 年間で 5 回 以上実施
伊豆半島防災(減災)文化の情報発信	静岡県・構成市町 ジオパーク推進協議会	実績集約	紹介 ページ 整備	情報蓄積 情報発信	情報発信 国際交流	情報発信 国際交流	サイト訪問者数 前年比+10%

災害サイトを活用したツアー造成・実施	ジオパーク推進協議会 伊豆半島ジオガイド協会 ジオガイド 美しい伊豆創造センター	ツアー 企画 作成	ツアー 造成 3回 以上	ツアー 実施 3回 以上	ツアー 実施 3回 以上	ツアー 実施 3回 以上	ツアー参加者 前年比+10%
災害記録のデジタルアーカイブ化・公開	静岡県・構成市町 ジオパーク推進協議会 伊豆半島ジオガイド協会 ジオガイド 地域住民	実施準備	データ 収集	データ ベース 構築	公開・ 運用	運用	収録データ件 数前年比+10%
防災教育モデル校の支援	ジオパーク推進協議会 学校、地域住民、静岡大学	実施校 調査	1校指 定	1校指 定	1校指 定	1校指 定	毎年1校指定



5. 運営体制の強化

5-1 基盤整備強化の基本的な考え方

ジオパークの活動を推進するためには、継続的に管理運営ができるしっかりとした管理運営組織が必要であることから、15 の構成自治体、交通事業者や地域のメディアを含む 76 団体で構成される推進協議会を発足させ、活動を行っています。会員は以下のとおりです。構成団体は引き続き、担う役割を再認識し分担し活動に取り組みます。

ジオパーク活動の基本は、地域住民主導のボトムアップ型の取り組みです。今後もこれを念頭に、住民参画の仕組みを整え、様々な分野の関係者が議論の場を可能な限り設定していく必要があります。引き続き、伊豆地域の地域住民に支えられるジオパーク活動の運営体制の確立により、持続的なジオパーク活動が伊豆半島を元気な地域として持続できるよう取り組みます。

5-2 運営組織：伊豆半島ジオパーク推進協議会

推進協議会は、総会、幹事会、事務局、専門部会により構成されます。総会は原則として年 1 回、各団体の代表者で開催し、規約の制定・改廃、事業計画・予算等の決定やその他重要事項の審議を行います。幹事会は総会に諮る案件の検討や事業計画の執行を

表 5-2 伊豆半島ジオパーク推進協議会会員一覧（令和 3 年 4 月 1 日現在）

【地方自治体】静岡県、沼津市、熱海市、三島市、伊東市、下田市、伊豆市、伊豆の国市、東伊豆町、河津町、南伊豆町、松崎町、西伊豆町、函南町、清水町、長泉町

【会員団体】

17 観光協会（沼津、戸田、熱海、三島、伊東、下田、伊豆、伊豆の国、東伊豆町、河津町、南伊豆町、松崎町、西伊豆町、函南町、ながいずみ観光交流協会、清水町ゆうすい未来機構、堂ヶ島温泉旅館組合

5 商工会議所（沼津、熱海、三島、伊東、下田）

11 商工会（沼津、伊豆、伊豆の国、東伊豆町、河津町、南伊豆町、松崎町、西伊豆町、函南町、清水町、長泉町）

4 ガイド団体（天城自然ガイドクラブ、伊豆半島ジオガイド協会、伊豆半島ジオマリンクラブ、ジオテラス）

まちこん伊東、三島建設業協会、下田建設業協会、伊豆急ホールディングス株式会社、伊豆箱根鉄道株式会社、伊豆箱根バス株式会社、東海自動車株式会社、静岡県タクシー協会伊豆部会、株式会社伊豆バス、一般社団法人ふじさん駿河湾フェリー、静岡県道路公社、静岡銀行、三島信用金庫、沼津信用金庫、株式会社伊豆急ケーブルネットワーク、堂ヶ島マリン、堂ヶ島レジャー、静岡ガス株式会社

【学術顧問】静岡大学防災総合センター

【顧問】国土交通省沼津河川国道事務所、気象庁静岡地方气象台、林野庁伊豆森林管理署、環境省富士箱根伊豆国立公園管理事務所

担い、事務局は具体的な活動の執行とジオパークの窓口機能を担います。こうした活動を専門的見地から補佐する専門部会は教育部会を設置しています。

事務局は、伊豆半島の中心に近い伊豆市修善寺に設置しており、令和3年6月現在10名の職員で運営されています。事務局では3名の研究員（地質学・地理学・社会学）を専任雇用する体制を敷きジオパークにおける研究を実施するとともに、ジオパークの各サイトの解説や解説板製作、教育、普及活動を担当します。

ユネスコ世界ジオパークの運営は国の法令下で法的位置づけのある団体による管理運営がユネスコによって定められています。現在、推進協議会は任意組織であるため、推進協議会では一般社団法人美しい伊豆創造センターへの統合による法人化に向けた協議を行っており、2022年度（令和4年度）からの法人化移行の基本方針が2020年（令和2年）12月開催の伊豆半島7市6町首長会議で了承されました。

伊豆半島ジオパーク推進協議会は、法人化移行後には一般社団法人美しい伊豆創造センターのジオパーク推進部門に移行しますが、法人化移行後も研究活動や国際交流に取り組むための専門職員の確保や、ジオパークがエリア内の交通事業者や宿泊事業者、アクティビティ事業者など事業者とのパートナーシップ協定の締結により、幅広く安定した活動を目指します。

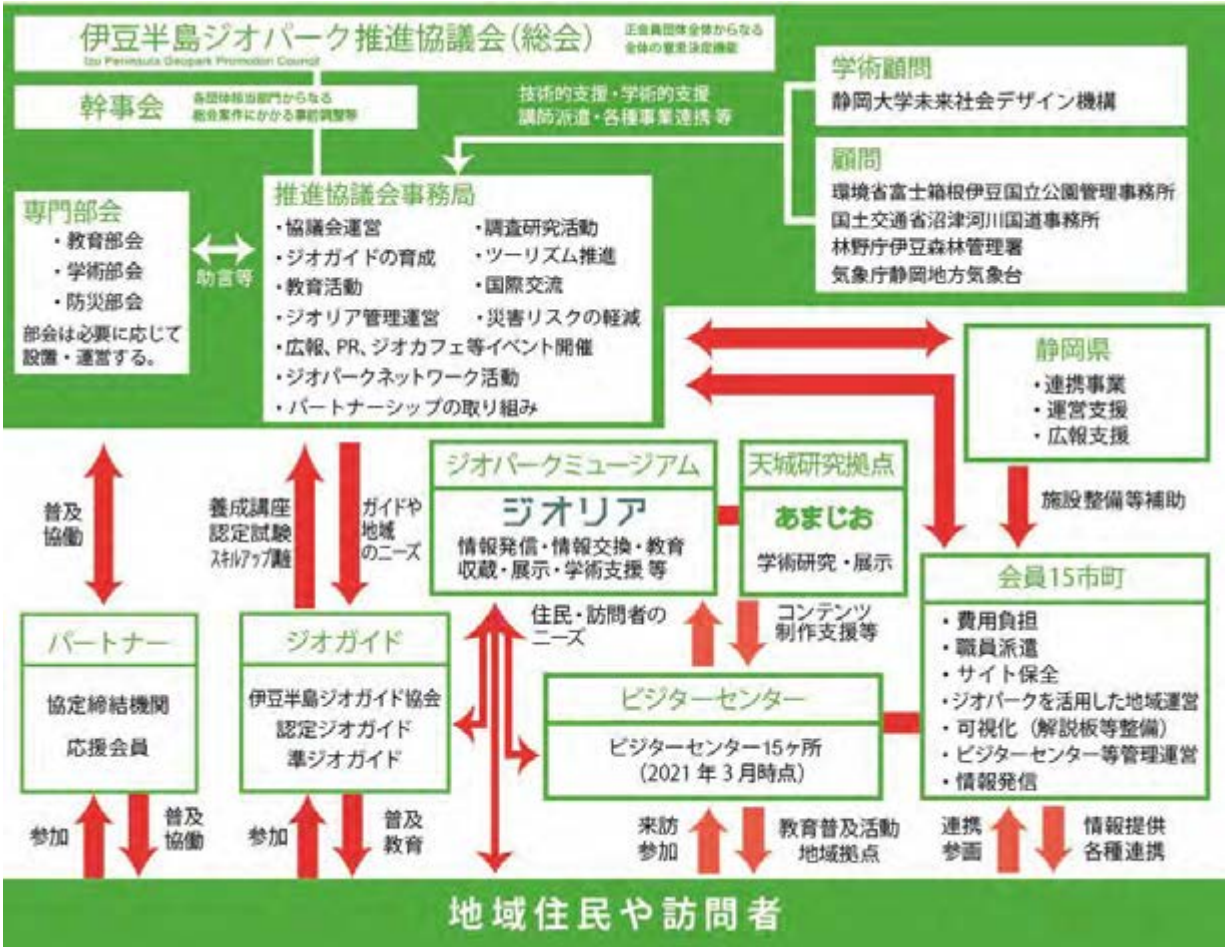


図5-3 伊豆半島ジオパーク推進協議とステークホルダーとの関係模式

5-3 協議会をサポートする組織・仕組み

伊豆半島ジオパークでは、静岡大学からジオガイド養成、地質学に関する普及講演をはじめ支援を受けており、その他の大学との協働も図っているところです。今後も、研究保全活動、教育活動、観光開発、防災活動について相互連携と、地域住民主導のボトムアップ型の活動を基本にジオパーク活動へのサポート強化を図ります。

5-4 ジェンダーの平等にむけた取り組み

伊豆半島ジオパークは2018年（平成30年）の世界認定の際、女性の役割向上について勧告がありました。推進協議会の事務局職員は毎年交代しており、一時期は女性がほぼ半数を占めたこともありましたが、2021年（令和3年）4月時点では事務局職員10名中1名が女性です。したがって職員におけるジェンダーバランスの是正を図るべく、職員派遣をお願いしている市町には女性職員の派遣考慮を要望しています。なお、ジオパーク活動の主体を担う伊豆半島ジオガイド協会では、多くの女性ジオガイドが活動しています。今後も引き続き様々な活動の場において女性の役割向上に取り組み、ジェンダーの平等を達成します。

5-5 財政計画

推進協議会は独立した予算・財務管理を行っています。主な収入は各会員からの会費（主に15の自治体）と県補助金等であり、ガイド養成や広報普及をはじめとした事業や直接雇用の人件費などの運営費に充てています。エリア内にある15のビジターセンターの整備運営やサイトの解説板、遊歩道、トイレ、駐車場などのハード整備は、2011年度（平成23年度）以降、各市町や民間事業者が静岡県からの補助金を活用しながら設置しています。

伊豆半島ジオパーク推進協議会の年度運営予算額推移（単位：千円）

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	平成31年	令和2年
運営費	147,840	76,680	77,700	72,591	81,494	81,557

2015年度（平成27年度）に中央拠点施設である「ジオリア」を設置しました。今後も解説版の未設置サイトの解消に向け各市町と協力して設置するとともに、ネットワークへの貢献を含め安定した業務運営のための必要な予算を確保について静岡県及び構成市町に要請していきます。

伊豆半島ジオパーク推進協議会の運営予算計画（単位：千円）

	令和3年	令和4年	令和5年	令和6年	令和7年
運営費	80,000	80,000	80,000	80,000	80,000
うち市町負担	36,350	36,300	36,250	36,200	36,200
うち県補助	12,000	12,000	12,000	12,000	12,000

5-6 自主財源の確保による財政基盤の強化

これまで、ジオパーク活動は静岡県や構成市町の財政負担により活動がなされてきました。ジオパーク活動を長期間継続するためには、独自の財源確保について取り組む必要があります。自主財源の確保については、基本計画や行動計画に基づき、独自の事業展開により、活動により地域の振興への波及効果を明確になることが重要です。

ジオパーク独自の活動資金の確保対策を進め、財政基盤の強化を図ります。また、美しい伊豆創造センターとの連携によりジオパーク活動への支援を目的とした企業版ふるさと納税制度による財源確保にも取り組みます。

5-7 施設管理運営

5-7-1 中央拠点施設「ジオリア」



図5-4 ジオリアにおける小学生のジオ学習 および 2021年企画展の様子

伊豆半島ジオパークの中央拠点として、2016年（平成28年）4月に伊豆半島ジオパークミュージアム「ジオリア」をオープンしました。訪問者への普及広報活動、サイトの解説、教育活動、に活用しています。この施設は伊豆半島のみならず国内や世界のジオパークに関する情報収集も行い、各ビジターセンターへの情報発信機能を有するとともに、各ビジターセンターから地域の情報を収集する機能もあります。

中央拠点施設にはジオガイドが常駐し、展示室をはじめ、ライブラリなどの教育機能、事務局、ガイドの拠点が併設されています。さらに、岩石標本の調製（岩石カッター等）も可能で、展示物の随時更新や、内外の研究者との協働を行っています。施設の運営にあたっては、ジオパークに関心を持つ人々が参加、交流し、とも



図5-5 ジオパーク活動拠点の立地

にジオパークを作り上げていくために役立つ施設であることを心掛けています。中央拠点施設として、すべての年齢層をターゲットに、様々な切り口から伊豆半島を学べるワークショップイベントを定期的を開催しています。

今後も本施設のコンセプトである46億年前に誕生した地球が姿を変え、火山活動やプレート運動によって形作られた伊豆半島の歴史の旅を誰もが理解でき、楽しめるよう企画展や、常設展示の更新に計画的に取り組めます。

5-7-2 ビジターセンターの整備と運営・ネットワーク化

伊豆半島ジオパークは面積が広く、訪問者の入口も熱海、函南、三島、長泉、沼津そして海路のある熱海、伊東、伊豆と複数あります。拠点施設である「ジオリア」だけでは様々な来訪者へのジオパークの情報を伝えきれません。そこで、訪問者に対して効果的に情報伝達

するために、原則として各市町（計15市町）に1か所ずつ、周辺地域の情報提供を目的とするビジターセンターを設置しています。ジオリアと各ビジターセンターは、互いに機能を分担しつつ、情報交換を行えるようネットワーク化し、どのエリアへの訪問者に対しても、楽しみながら伊豆を学べる場を提供し、各ビジターセンターで共有できるような仕組みを目指します。特に範囲の広い伊豆半島ジオパークにおいては、多くのビジターセンターは来訪者への可視化にも寄与しており、積極的な情報発信活動によりさらに認知度向上を図ります。

5-7-3 あまじお 利活用計画

2019年（平成31年）4月、伊豆市は旧湯ヶ島小学校を天城湯ヶ島コミュニティ複合施設として再整備しました。施設内には静岡大学との共同研究拠点施設としてジオパークが利用する「あまじお」も整備されました。静岡大学も伊豆半島ジオパークと連携した研究成果を提供し、伊豆半島ジオパークの研究ハブ的な機能を有する施設として利活用を図ります。伊豆半島の地質、生態、文化等のジオパークを構成する要素の研究拠点として

表5-3 ビジターセンター一覧

ビジターセンター名	開設年月日
長泉ビジターセンター (コミュニティながいずみ内)	2016.4.1
三島ビジターセンター (三島総合観光案内所内)	2013.7.1 2017.6.1 移転
沼津ビジターセンター (道の駅くるら戸田内)	2015.4.1
清水町ビジターセンター (柿田川公園わくら柿田川内)	2019.4.1
函南ビジターセンター (伊豆ゲートウェイ函南内)	2017.5.1
熱海ビジターセンター (JR熱海駅ラスカ観光案内所内)	2016.11.25
伊豆の国ビジターセンター (道の駅いずのへそ内)	2015.6.1
ジオポート伊東 (伊東港船客待合所内)	2016.4.21
ジオテラス伊東 (伊豆急行伊豆高原駅構内)	2015.3.22
東伊豆ビジターセンター (熱川温泉観光協会内)	2014.4.1
天城ビジターセンター (道の駅天城越え・昭和の森会館内)	2013.7.7
西伊豆ビジターセンター (こがねすと内)	2016.4.28
松崎ビジターセンター (明治商家中瀬邸内)	2014.4.1
下田ビジターセンター (道の駅開国下田みなと内)	2014.5.1
南伊豆ビジターセンター (石廊崎オーシャンパーク内)	2019.4.1

利活用し、併せてオープンスペースについても来訪者がジオパークの魅力を感じられるような情報発信の強化に努めていきます。

行動計画 2021～2025 年度に取り組む事業							
取り組み	実施主体	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	2025 (R7)	2025 数値目標
法人化への移行 （一社）美しい伊豆創造センター統合	方針決定：7市6町会議 美しい伊豆創造センター ジオパーク推進協議会	準備	法人化				法人化による 管理運営
ジオリアの運営	ジオパーク推進協議会 （ジオガイド協会）	実施	実施	実施	実施	実施	目標来館者数 前年比+5%
ジオリア企画展	ジオパーク推進協議会	年3回 開催	年3回 開催	年3回 開催	年3回 開催	年3回 開催	5か年で 15回の企画展 開催
あまじお利活用 【再掲】	ジオパーク推進協議会 静岡大学・伊豆市	協定 締結	セミナー・イ ベント開催	セミナー・イ ベント開催	セミナー・イ ベント開催	セミナー・イ ベント開催	セミナー・イ ベント参加者 年200名
ビジターセンターの 整備・運営	市町、管理運営団体 協力：ジオパーク推進協議会	管理 運営	管理 運営	管理 運営	管理 運営	管理 運営	目標来館者数 前年比+5%
ビジターセンター 案内表示の多言語化	市町、管理運営団体 協力：ジオパーク推進協議会	ガイドライン 策定	多言語化	多言語化	多言語化	多言語化	案内表示 多言語化率 100%
ビジターセンター (VC)間連携事業	構成市町 管理運営団体 ジオパーク推進協議会	無人VCを含めた 連携企画実施（巡回展） 1回 WSの共催（技術移転） 1回 交流会の実施 1回	研修事業 年1回 WSの共同（技術移転） 1回 巡回展 連携実施 1回	WSの共同（技術移転） 1回 巡回展 連携実施 1回	研修事業 年1回 WSの共同（技術移転） 1回 巡回展 連携実施 1回	半島内VCをネット ワーク化、VC全体の 質向上	研修事業 年1回 有人VC 連携企画実施 1回 WSの共同開催 （技術移転） 1回

6. ネットワーク活動の強化とパートナーシップ



6-1 基本的な考え方

ネットワーク活動はジオパークの活動の特徴のひとつです。ネットワーク活動にはサイト間、ジオリアと各ビジターセンター、地域住民や地域資源をつなぐネットワークなど様々な取り組みがあります。伊豆半島ジオパークでは平成 27 年にジオパークの取り組みを支援する、企業向けの応援会員制度と個人向けのサポーター制度を創設し、連携した活動の端緒としました。このほかジオパークではそれぞれの地域の活動事例やアイデアを持ち寄り、互いに学び合うことで、相互の活動促進や新たな価値の創造に取り組んでいます。こうした取り組みに積極的に関与して、連携活動に取り組みます。

6-2 世界ジオパークへの貢献

2014 年（平成 26 年）の第 6 回 GGN 国際会議（カナダ）への参加以降、毎回の GGN 国際会議および APGN シンポジウムに参加して来しました。そこでは伊豆半島の事例を発表し、実践例を共有したり、研究報告を行ったりしています。特に、第 8 回 GGN 国際会議（イタリア、アダメロブレレンタ）においてジオパーク推進協議会会長（伊豆市長）が口頭で講演。地質遺産の保全を意図したものの結果的に景



図 5-6 菊地会長による GGN 大会での講演

観を破壊し、ジオサイトに認定できなかった事例を責任者の立場から自戒を込めて報告しました。失敗事例を共有する姿勢に世界各地のジオ関係者から高い評価を得ました。このほかシンポジウムでは質疑に積極的に関与、実質を伴う国際交流を実施しています。また 2017 年（平成 29 年）にはユネスコ主催のレスボス集中研修に研究員を派遣、ユネスコ/GGN 諮問委員らとも積極的に意見交換を行って理念を持ち帰り伊豆半島内で共有したほか、伊豆半島での実践例をジオパーク準備地域へ紹介して交流の端緒としました。

今後も責任ある世界ジオパークのメンバーとして、伊豆半島ジオパークの優良事例を発信するとともに、世界ジオパークの優良取り組み事例からも学ぶことを意識した取り組みを強化します。またジオパークが相互に学び合う活動理念に基づき、ユネスコの世界認定、再認定にあたり研究員を審査員として派遣します。また継続的に派遣できる体制を構築します。

6-3 アジア地域でのジオパーク活動

6-3-1 インドネシア、チレトゥー—パラブハンラトゥユネスコ世界ジオパークと

の交流

静岡県と姉妹提携を持つインドネシア、西ジャワ州には伊豆半島と同時にユネスコ世界ジオパークに認定されたチレトゥーパラブハンラトゥジオパークがあります。これまで、先方ジオパークの運営者を技術研修で招へい、インドネシアで実装できることを主眼に置いた解説板、電子地図の作製、サイトの保全にかかる技術移転を実施し、貢献をしました。また、資料を交換して相互のミュージアムで展示を行っています。2019年（令和元年）には両ジオパーク間で協力に関する覚書きを交わしました。今後も協力協定にもとづいて相互の活動によって学びあい、価値を高めていきます。



図5-7 静岡県庁での協力覚書の締結

6-3-2 アジア地域へのジオパーク普及、協働活動

ユネスコジャカルタ事務所主催、アジア太平洋地域のユネスコ担当職員向けのジオパーク研修において、ジオパークにおける教育への適用実践について講師を派遣しました。また複数の機会においてネパールでジオパークに関心のある官吏・大学教員に対して、ジオパーク概念の導入やジオサイト保全の具体的な方法の技術移転を実施し、ジオパーク未実装地域への普及啓発に貢献しました。また韓国のジオパーク準備地域へジオガイドを派遣し、ジオガイド実践事例の紹介を行いました。世界ジオパーク認定後は各国のジオパーク視察を複数受け入れてきました。

このように個別の対応で先方のニーズに合うジオパークの普及や能力支援（capacity building）を重ね、アジア太平洋地域でのプレゼンス強化に努めていきます。

6-4 日本ジオパークネットワークへの貢献

伊豆半島ジオパークでは、毎年国内各地で開催される全国大会や全国研修会、中部ブロック研修会等に研究員、職員やジオガイドが積極的に参加して伊豆半島ジオパークの取り組みを報告しています。今後も国内ジオパークとの積極的な交流を通じ、国内各地のジオパークや日本ジオパークネットワーク活動にも貢献していきます。

6-5 パートナーシップ活動の強化

伊豆半島ジオパークは、ユネスコ世界ジオパークに求められるパートナーシップの戦略に基づき、基本的な取り組みとして位置づけている研究と保全、教育活動、地域振興に必要な活動を通じ、ひいてはSDGsの目標達成に貢献すべきであることをその基本的な方針とします。2020年（令和2年）に伊豆半島の活性化、振興に資し併せてSDGsを達成す

ることを目的に、地域のガス会社との間で10年間という長期にわたる包括的な連携協定の締結をしました。伊豆半島ジオパークの資源であるの食材や食文化の理解促進、地産地消の推進、環境理解と防災の普及、地域経済の向上を共同で取り組みます。パートナーシップ戦略は地域への波及効果にもとづいて現在は個別協定を採っています。

伊豆半島ジオパークでは企業向けの応援会員制度があります。ジオパークの趣旨に賛同していることが基準で、持続可能な伊豆半島を作り上げることが活動目的です。ここに所属する企業・団体とは実質的パートナーとして位置付けています。このほかエコツーリズム全体構想を策定し、サステイナブルツーリズムを推進する事業者やジオガイドのアクティビティを予約できるポータルサイトの開設の準備を進め、ジオパーク内の事業者との協力関係を強化していきます。このほか、世界遺産である「韮山反射炉」との連携・協業、地域内の企業、民間事業者、高校や大学といった教育研究機関、地域内外で地域づくりや環境活動に取り組み各種団体とのパートナーシップの締結を目指し、パートナーシップの構築によるネットワーク活動の推進に取り組みます。

＜パートナーシップ協定＞

企業・団体とのパートナーシップ協定締結にあたっては、下記の原則が盛り込まれることに留意します。

- 保全、教育、または、地域振興(活性化)に資すると認められること
- SDGs 達成に貢献できると認められること
- 一過性でなく継続性を持つこと
- 双方にとってメリットがあること

＜ネットワーク活動＞

協定締結にかかわらず、個々の企業、団体、教育研究機関、地域づくりや環境保全活動に取り組む各種団体とのネットワーク活動を推進します。その連携にあたっては、上記のパートナーシップ原則に留意して対応します。

行動計画 2021～2025 年度に取り組む事業							
取り組み	実施主体	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	2025 (R7)	2025 数値目標
世界ジオパークへの貢献 国際大会への参加 口頭発表 審査員派遣	ジオパーク推進協議会	参加 派遣	参加 派遣	参加 派遣	参加 派遣	参加 派遣	2025 年、 ユネスコ 審査員派 遣 2 名
チュレトゥーパラ ブハラントゥ世界ジオパ ーク(インドネシア)との 相互協力	ジオパーク推進協議会	博物 館で の相 互展 示	学校 教育 での 協力	研修 受入 れ、 相互 訪問	協定 延長 につ いて 協議	学校 教育 での 協力	実質成果 にもとづ く協力協 定の更新 延長
アジア地域へのジオパ ーク能力支援、協働	ジオパーク推進協議会	APGN 活動	APGN 活動	適時 受入 派遣	適時 受入 派遣	適時 受入 派遣	視察、教 育旅行の 毎年受入

日本ジオパークネットワークへの貢献	ジオパーク推進協議会	適時参加	適時参加	適時参加	適時参加	適時参加	全国研修会の開催
「韮山反射炉」との相互連携協定の締結と協定に基づく事業	ジオパーク推進協議会 伊豆の国市	企画展実施 保全・啓発・教育に係る連携活動	企画展実施 保全・啓発・教育に係る連携活動	企画展実施 保全・啓発・教育に係る連携活動	企画展実施 保全・啓発・教育に係る連携活動	企画展実施 保全・啓発・教育に係る連携活動	2025年度までの連携事業数 10事業
企業や民間事業者とのパートナーシップ協定に基づく事業	静岡ガス株式会社 民間事業者	5事業実施	5事業実施	5事業実施	5事業実施	5事業実施	5年間で 25事業
大学との連携事業、協定締結	静岡大学 県内大学等	協定締結	連携事業実施	協定締結	連携事業	協定締結	協定締結 3大学以上 連携事業5 か年で5事業

7. 普及広報・情報発信計画



7-1 基本的な考え方

地域住民へのジオパークの理解促進と来訪者への可視化による認知度向上をはかるため、引き続き SNS など多様な媒体を通じた積極的な情報発信活動に取り組みます。

7-2 可視化（案内板、解説板の設置）

伊豆半島ジオパークを訪れる訪問者が「今、ジオパークに居るのだ」と認識することは、ジオパーク活動の端緒ともいえます。したがって伊豆半島への玄関口に「ここはジオパークです」ということが明確に分かる通称「ウェルカム看板」の設置は必須です。そこで伊豆半島の玄関口になる三島駅南口、北口には伊豆半島ユネスコ世界ジオパーク全体を紹介する解説板を設置し、ウェルカム看板の役をなしている。このほかにロータリークラブが熱海、伊東、下田にロードサイド型のウェルカム看板を設置しています。しかしながら可視性や認知度が十分でない点是否めなく、JGC 勧告においても「熱海等ゲートウェイでの視認性向上」が指摘されました。したがってこの点の改善が必須です。



このほかにジオパークにおける可視化を代表するツールが、各サイトに設置の「解説板」である。サイトの成り立ちを簡潔に記述した日英併記の解説板を自治体や地元企業、NPO が既存の観光案内板等と調整を図りながら設置しており、2021 年（令和 3 年）3 月末までに 141 基を整備しました。板面の内容とデザインについては、最新の研究論文や科学的知見に基づいて協議会研究員が作成しています。解説板は景観に配慮した共通のデザインのもと、小学校高学年に分かる解説にするとともに、協議会の WEB サイトへのリンクを記した QR コードを付し、関連情報への誘導をしています。

解説板はすべて英語を併記し、写真やイラスト、地図を有効に使い、文量も限定して理解しやすいよう工夫しています。解説板はウェブサイトでも閲覧ができます。2018 年（平成 30 年）の世界認定後、推進協議会は既存解説にユネスコロゴを付記する更新を順次行っています。ユネスコ世界ジオパーク認定を受けたことで「ユネスコ世界ジオパーク」として、ジオサイトの案内・解説板などについてはユネスコリンクドロゴを添付し、



図 5-8 各ロゴ（左から右へ、伊豆半島ジオパーク、ユネスコ世界ジオパーク、GGN、APGN、JGN）

「ユネスコ世界ジオパーク（UNESCO Global Geopark）」であることを明示することが求められています。

またユネスコ世界ジオパークとなったことで、「世界ジオパークネットワーク（Global Geoparks Network=GGN）」及び「アジア太平洋ジオパークネットワーク（Asia Pacific Geoparks Network=APGN）」に加盟したことから、これらのロゴも添付しています。

＜民間団体設解説板整備の基本的な考え方＞

民間事業者や地域団体による解説板設置にあたっては、設置解説板を多くの方が見られること、ジオ学習やジオツアーに活用できることを重視し、推進協は次の原則を踏まえて支援します。

設置者負担＝解説板の設置、管理は、構成市町等設置団体が負うことを原則とします。

監修・支援＝ジオパーク推進協議会は、わかり易い内容の解説板整備の助言を科学的知見に基づきデザインを提供します。

＜老朽解説板の更新＞

潮風が直接当たる場所に立てられた解説板には劣化が進んでいるものがあります。設置者と協議の上、劣化した解説板を放置することのないように努めます。

＜解説板およびウェルカム看板設置の働き掛け＞

重要なサイトやアピール効果が見込める場所に解説板およびウェルカム看板設置による啓発普及効果には大きいものがあります。そうした効果が見込める場所について、管理者に看板設置を働き掛けていきます。

7-3 WEBの活用による発信力の強化

ウェブサイトは2017年度（平成29年度）に大規模に改修し、ジオパークの基本情報やみどころ、アクティビティの紹介、イベント情報、各種資料のダウンロードの基本機能を有します。サイトの特徴は見どころを個別に紹介するだけでなく、地域や観察できる現象、テーマ、地質時代などによってタグ付けされ、閲覧者の興味関心によって複数のみどころを次々に閲覧できるようになっています。各みどころ紹介のページには、解説やアクセス情報に加え、安全に見学するための「危険情報」や、より詳細な情報を求める方向けの「学術情報（そのサイトを対象とした論文の紹介）」も掲載しています。また台風などの災害時にはサイトの被害状況も提供しています。

ウェブサイトには1日あたり平均1000ユーザー程度の訪問があります。静岡県内の観光関連サイトの中でも上位のトラフィックを獲得しており、ジオパークの普及や訪問客誘致に繋がっている。SNSはtwitter、Facebook、Instagram、YouTubeを運用しており、イベントの実況や時事マターなど、ウェブサイトより身近でタイムリーな話題提供を行っています。

2020 年（令和 2 年）にはオンラインで伊豆半島のバーチャル旅行やオンラインで過去のイベントを体験できる特設ページを設けました。今後もキッズサイトやジオ学習やツーリズム、地域の活動紹介などウェブサイトのさらなる充実をはかります。

7-4 印刷物の作成・更新

<印刷物の制作/監修>

推進協議会では訪問者や地域住民に向け、伊豆半島の成り立ちや主要サイトを自然・食・歴史などと併せて紹介する「伊豆ジオマップ」を 5 言語（日本語・英語・簡体字・繁体字・韓国語）で、また訪問客をターゲットに東西南北 4 エリアごとの「ドライブマップ」を作成しています。これら地図類について、ジオガイドと協力し内容を随時更新してビジターセンターや道の駅、観光・宿泊施設で配布しており、ジオパークの認知向上の強力なツールになっています。

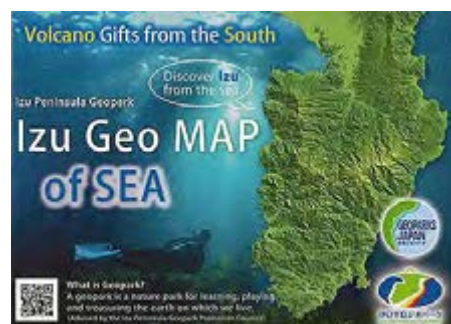


図 5-9 伊豆海ジオマップ

このほか、地質や植生などの自然や文学をハイキングしながらセルフガイドツアーで巡ることのできる「フットパスマップ」を作成しました。加えてマリンアクティビティ事業者との協働で、上述の伊豆ジオマップについて海域を対象として海の中のジオを紹介する「伊豆海ジオマップ」を作成しました。これらのアクティビティマップは日本語・英語の 2 言語で作成、海外からの訪問者にも伊豆のアクティビティを楽しめるようにしています。

教育用の素材として、児童生徒向けにまんが「伊豆半島のひみつ」を作成、伊豆半島ジオパーク内の小学 5 年生全員を対象に毎年配布を開始し、ジオパークを活用した学習に用いています。また伊豆を代表する文学作品である川端康成（ノーベル文学賞受賞）著「伊豆序説」を用いて、語り手による朗読のもと伊豆半島を総合的、俯瞰的に紹介する DVD 作品を 2020 年（令和 2 年）に制作しました。特に地域学



図 5-10 「伊豆序説」DVD の 1 シーン

習に供し、管内すべての学校に配布し、伊豆半島の再理解に広く利用されています。人気のある伊豆ジオマップ、ドライブマップマップは啓発効果も大きく、引き続き継続的に制作していきます。そのほか、ニーズを踏まえつつタイムリーな制作物作成に取り組めます。

<書籍>

より広範な普及媒体として書籍があります。推進協議会学術顧問の静岡大学小山真人教授によりドローンを用いた空撮写真を使った伊豆半島の地形地質解説「ドローンで迫る 伊豆半島の衝突」が2017年（平成29年）に刊行、一般向けの書籍では令和元年にアトリエ・ロッキー社が、伊豆半島ジオパークのドローン空撮写真集「神々のジオ」を発行しました。2020年（令和2年）には協議会学術顧問である静岡大学災害総合センターが中心となって編著した「静岡の大規模自然災害の科学」が出版、多くのページを伊豆半島の事象に割いています。

2021年（令和3年）3月、静岡新聞社は改訂版公式ガイドブック「伊豆ジオ100」を発行、ジオサイト100カ所について、見どころ、成り立ち、歴史、文化的背景などを紹介しました。推進協が監修にあたりました。

引き続き良質な書籍の発行に努めます。同時に大学・研究機関、民間事業者が取り組む良質な書籍編集を支援していきます。書籍に関しては、発行して終わりとなってしまいうのではなく、広い普及を狙って出版会社による書籍化、流通を視野に入れていきます。

7-5 民間事業者との協働事業（牛乳小話・ジオトレイン・こども絵画コンクールなど）

2018年（平成30年）夏から函南東部農業協同組合と連携して、200ml入り丹那牛乳のパックにジオ小話を表示する牛乳小話プロジェクトを展開している。200mlパックは年間1000万本以上、主として伊豆地域の学校給食に提供されており、その教育効果は非常に大きい。令和元年にスタートした第2版では、70歳以上のシニア層から作品を公募。同時に高齢者施設の希望があればジオガイドが出向いて作品づくりを支援する出前講座の制度も整え、学校だけでなく高齢者の地域学習、ジオパークの啓発普及も意図した取り組みです。

伊豆急行は、鉄道1編成に各地ジオサイトの写真ポスターを展示し、訪問者にジオパークを紹介するジオトレインを継続的に運行しています。2019年（令和元年）と2020年（令和2年）には伊豆箱根鉄道も1編成をジオトレインとして運行しました。この車両では地元の高校生がジオサイトを題材に制作したステッカーを掲出しており、鉄道会社、高校、推進協議会三者の協力により実現したもので、利用者にタイムリーな情報発信を行っています。

ジオパーク子ども絵画コンクールは、伊豆半島に在学、在住する小・中学生を対象に夏休みを含む時期にジオサイトを描いた絵画作品を募集しコンテストを行っています。ねらいは子供たちが家族でジオサイトを訪問し、ひいては地域を知り、誇りに思う機運醸成にある。2017年（平成29年）から開始し年々応募作品は増え、2019年（令和元年）は200点弱が集まりました。拠点ミュージアム「ジオリア」のほか、ビジターセンター、協賛企業で巡回展示を行いました。

＜牛乳小話＞

2019 年（令和元年）にスタートした牛乳小話の第 3 弾では、大木乳業の協力を得て「伊豆牛乳」にも掲載されることとなりました。これによって伊豆地域全域の学校給食にジオ小話の掲載された牛乳が提供されることとなります。今後は概ね 2～3 年に 1 度、更新していきます。

＜伊豆急ジオト레인＞

写真ポスターは劣化により概ね 3 年に一度、更新していく必要があります。伊豆地域を訪れる観光客へのアピールに有効と判断しており、伊豆急行と連携しつつ更新に取り組んでいます。

＜伊豆箱根ジオト레인＞

伊豆急ジオト레인が観光アピールであることに対し、伊豆箱根鉄道のジオト레인は地元高校生の発表の場としての性格を有しています。引き続き推進協は同社の協力を得て、発表高校との橋渡しの役割を果たしていきます。



図 5-8 伊豆箱根鉄道ジオト레인内のポスター（伊豆総合高校写真部制作）とジオト레인

＜子ども絵画コンクール＞

2020 年（令和 2 年）はコロナ禍のためこども絵画コンクールの代替企画として「私たちの住む伊豆半島ジオパーク」として伊豆半島在住者が毎月作品を応募できるデスクトップカレンダー企画を開催しました。三島信用金庫が後援し、半島内の店舗で作品を紹介しました。また共同企画として応募作品の展示会を開催します。こども絵画コンクールは今後も開催しますが、ジオサイトにこだわらないテーマ設定を検討します。

＜その他＞

そのほかポスター、ステッカーなどの制作物を掲載できそうな場所がかなり残されています。ただし、制作・掲載にはコストがかかります。啓発普及効果とコストを十分に勘案して、可能性を追求していきます。

7-6 マスメディアとの連携強化

報道機関向けのプレスリリースを戦略的に発出しており、例えば 2018 年度（平成 30 年度）のプレスリリースは 101 本で、ユネスコ世界ジオパークの中で世界最多を記録しました。これまで伊豆半島ジオパークは、会員(78 団体)、応援会員(150 社)、県市町広報担

当、報道機関(77社)、旅行会社(51社)、ジオサポーター(230人)、ジオガイド(189人)に直接プレスリリースを提供する独自の広報ルートを構築しています。ジオパークに関心のある住民には直接情報が届き、加えて頻度の高いメディアでの報道によってジオパークの認知度は向上しています。認知度の向上にしたがってメディアからの出演要請も多数あり、例えば NHK の人気全国番組で伊豆の解説を行うことができ、全国に伊豆半島ジオパークの周知を図ることができました。

自分たちの取り組んだ活動がマスメディアで報道されることは達成感醸成につながるだけでなく、関心を持つ人々の参考にもなります。引き続き積極的に広報に努めていきます。

7-7 ジョカフェをはじめとした地域連携イベント

ジョカフェやジオ検定、ワークショップをはじめとした企画の開催によって「伊豆半島ジオパーク」の認知度は高まりました。ジオパークは住民ひとりひとりの参加によって成立するものです。したがってこの人の輪をより大きく、継続的に実施することが大切です。また参画の入口を多様に用意することが肝心です。地質に依らないジオパークの普及として、ジョカフェにて伊豆半島に関するさらに多くの導入を用意し、みんなで動き続ける伊豆半島の一助とします。

行動計画 2021～2025 年度に取り組む事業							
取り組み	実施主体	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	2025 (R7)	2025 数値目標
サイト 解説板整備（可視化） 【再掲】	構成市町 民間事業者 地域活動団体等 (ジオパーク推進協議会も協力)	新設 及び 改修 3箇所	新設 及び 改修 3箇所	新設 及び 改修 3箇所	新設 及び 改修 3箇所	新設 及び 改修 3箇所	新設・改修 5年間で 15箇所以上
パンフレット等の 多言語化	ジオパーク推進協議会	作成 準備	新作 作成 1件	作成 準備	新作 作成 1件		5年間で 新規作成 2件
印刷物の作成・更新	ジオパーク推進協議会	準備 活動	新作 作成	準備 活動	新作 作成	更新	新規作成 2件
民間事業者・公共機関 との協働事業	交通事業者 民間事業者 ジオパーク推進協議会	2事業 実施	2事業 実施	2事業 実施	2事業 実施	2事業 実施	5年間で 10事業以上 実施
マスメディアとの 連携強化による情報 発信	ジオパーク推進協議会	プレスリ リース 件数 年間100 件	プレスリ リース 件数 年間100 件	プレスリ リース 件数 年間100 件	プレスリ リース 件数 年間100 件	プレスリ リース 件数 年間100 件	プレスリ リース件数 5年間で 500件以上
WEBによる情報発信 事業	ジオパーク推進協議会	閲覧者数 年間 35,000 ビュー	閲覧者数 年間 36,000 ビュー	閲覧者数 年間 37,000 ビュー	閲覧者数 年間 38,000 ビュー	閲覧者数 年間 39,000 ビュー	5年間のサイト 閲覧者185,000 ビュー以上
ジョカフェの開催	ジオパーク推進協議会 構成市町・研究者 ジオガイド	年6回 開催	年6回 開催	年6回 開催	年6回 開催	年6回 開催	5年間で 30回開催 全市町開催

第6章 活動と評価

1. 活動評価についての基本的な考え方

活動の評価は方針の見直しや戦略的な計画立案に欠かせません。これまでの基本計画に基づく行動計画には目標最終年次の2025年度（令和7年度）の達成目標が示されていることから、定期的な活動の内容と効果を検証し、新たに生じた課題等にも関係者の理解と協力を得ながら改善に向け取り組んでいきます。

一方、外部からの活動評価としては日本ジオパーク委員会（JGC）やユネスコによる再審査評価等様々な手法による評価を受けます。

2. 日本ジオパーク委員会（JGC）及びユネスコによる評価

伊豆半島ジオパークは4年に一度、日本ジオパーク委員会とユネスコによる評価を受けます。日本ジオパーク委員会による「審査事前確認調査」は、ユネスコによる再審査の前年に行われるものです。日本、世界ともに国際地質科学ジオパーク計画（IGGP）の定款とガイドラインに示されている考え方に沿ってジオパークの審査が行われています。伊豆半島ジオパークは2021年（令和3年）に、地質遺産の保全、活用の仕組みと取り組み、前回審査時からのジオパーク活動の進展、改善についてユネスコの審査を受け評価を受けることになっています。

3. GGNの年次報告書（毎年）

所定の書式（A4版で3ページ）で1年間の活動をまとめ、英文でGGNへ直接提出します。この活動レポートは、4年に一度行われる再認定審査における評価資料のひとつとなります。

4. ユネスコによる再審査（4年に1回実施）

所定の書式（A4版で25ページ以内）で過去4年間の活動をまとめ、英文で提出します。ユネスコ世界ジオパーク事業の日本委員会であるJGCより日本ユネスコ国内委員会の確認を経て、ユネスコに提出されます。ユネスコ/GGNによる書類審査後、現地調査が実施され、審査結果とともに指摘事項が示され、次の審査までに解決が求められます。

5. 顧客による評価

ジオパークの地域への浸透や活動の普及の度合いについて、アンケート調査や管理施設の集計等について継続的に調査し、活動評価の指標とします。

6. サステイナブルツーリズムの効果測定

伊豆半島ジオパークにおいてサステイナブルツーリズムを推進した結果得られる効果を図るための効果測定指標を設定しました。ここでは観光によって地域が持続可能な開発を実践し続けられるよう、環境、社会、経済、SDGs の各分野における成果指標を設定し、成果の「見える化」を図ると同時に、PDCA に基づき課題解決に向けた事業を展開するための基礎データの収集にあたります。

伊豆半島ユネスコ世界ジオパーク
基本計画・行動計画 2021-2025

2021 年（令和 3 年）7 月 31 日

伊豆半島ジオパーク推進協議会事務局
静岡県伊豆市修善寺 838-1
電話 0558(73)2255

